九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

竹細工の工芸化と茶筅工芸産地の変容 : 地域の構造と地域の計画

宮川, 泰夫
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・地域構造講座

https://doi.org/10.15017/8605

出版情報：比較社会文化. 4, pp.65-86, 1998-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第4巻（1998）65～86頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol. 4 (1998), pp. 65～86

竹細工の工芸化と茶筅工芸産地の変容

――地域の構造と地域の計画――

宮　川　泰　夫*
Yasuo MIYAKAWA

キーワード：血縁・地縁集団，構造変化，都・鄙関係

1　はじめに

竹は東洋において人間の生活文化と密着して，古くから生活用具として用いられてきた．竹は花の形態からイネ科に属するとされ，熱帯と亜熱帯のモンスーン地帯に広く分布している．小型のササは，樺太・南千島に及んでいるが，大型のタケは南方に多く，アフリカや中南米にも展開する．竹は，茎が木質で弾力性・割裂性と耐久性に富み，筒管としてもまた編物としても生活用具生産に適しているだけでなく，切削して又は加熱して形状を容易に整える事ができ，細工にも適している．竹は地下茎で無性的に繁殖し，その属種も多く，有性生殖後の枯死も10年程度で復元し，その風土・文化に適合した多用且つ豊富な生活用素材をなしてきた．生活は所得の向上とともに多様化し，余暇には精神と肉体の安らぎを竹の美観の内に求めて，人は，用具の工芸化をも追求してきた．茶器や花器はその典型である．

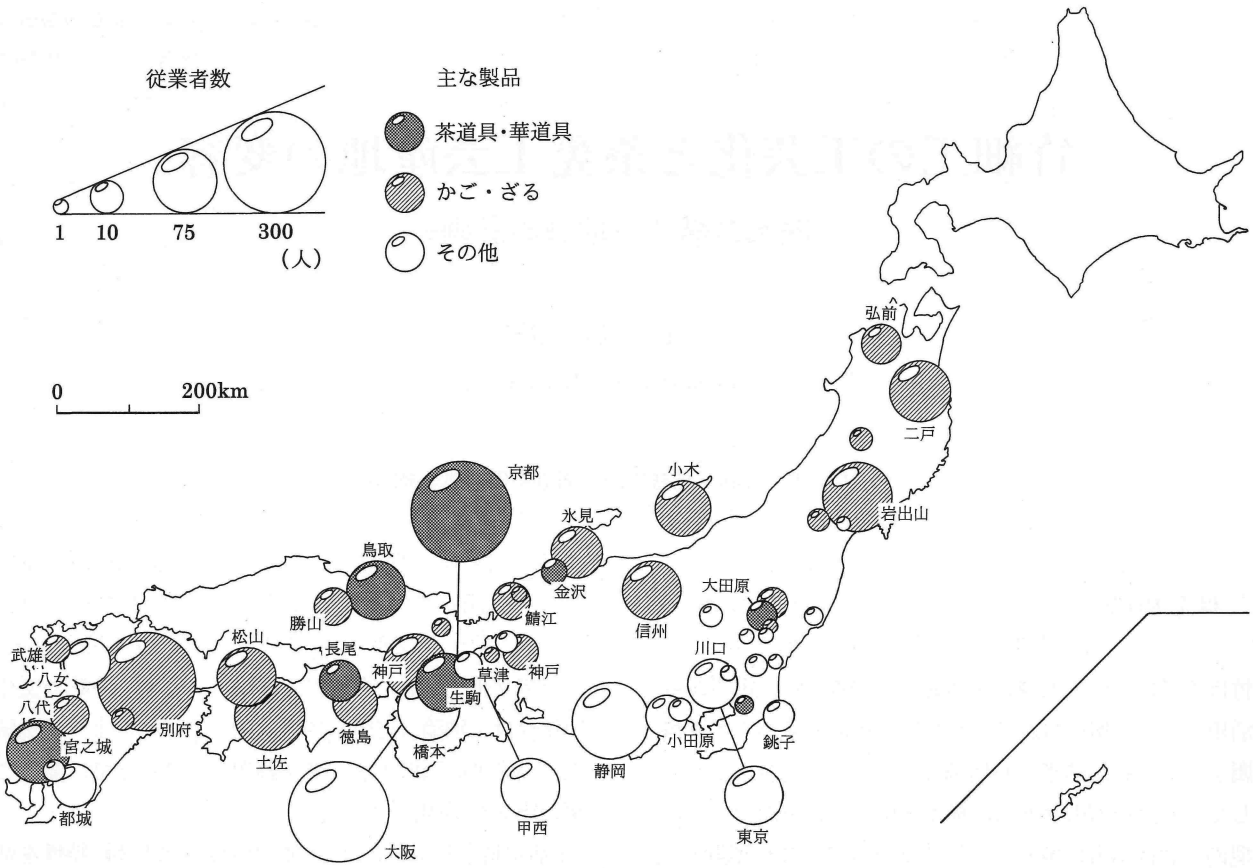
竹は今日では日本でも食用から防災用・建築用・器具用・工業用・医療用と多岐に亘って用いられている．しかし，古事記や万葉集・延喜式の記述から，竹は，日本にも古くから自生はしていたが，枕草子の清涼殿東庭の呉竹の埴栽や親鸞の越後鳥屋野の逆生竹の伝承にみられるように，平安から鎌倉にかけて内外から移植され，今日のような展開形態を示してきたと言えよう．日本紀略の弘仁4年（813）の天下呉竹悉埴の記述は中国からの移植を例示しており，温帯系の竹細工の中核地の華南地方との文化的連続性をも示唆している．これは，東南アジアや印度での地下茎の短い連軸系の熱帯系の竹材を活用した粗い細工物とは，細工の度合を異にしてはいるが，農具や漁具としての利用形態や注連縄に見られる文化性においては類似したものを有している．日向古墳の出土品をインドネシア系とした鳥居龍蔵の研究等を契機に論究されてきたように日本の竹細工は，アジア文化を基層に置いたものと言える．こうした文化的連続性は，別論（宮川　1989，92）で述べたように伝統的工芸品産地の国際工程分業を論究してゆく上で，見過ごす事の出来ない観点である．

生活用材としての竹は，水捌けの良い地下茎の特性を活用し，地震や地滑りの多い日本において，また環太平洋の新期造山帯に属するアジアにおいて防災用の保護林として，一般化して，竹細工原料の供給を円滑にしていった．日本を代表する真竹は，九州を原産地とし，東北を北限とし，竹細工の基本的材料をなしてきた．青森県の是川や亀が丘の縄文遺跡に見られる腐食を免れた籃胎漆器は，こうした全国的に古くから展開した竹細工工芸を表徴している．この籃胎漆器に施された網代は，漁具に用いられていた日常的手法であるが，これに加えた立体紋様は，工芸的なものであり，竹の持つ神秘な霊力を受けた櫛や竹玉等の装身具や笙や笛等の楽器細工で蓄積された美観を呈していた．

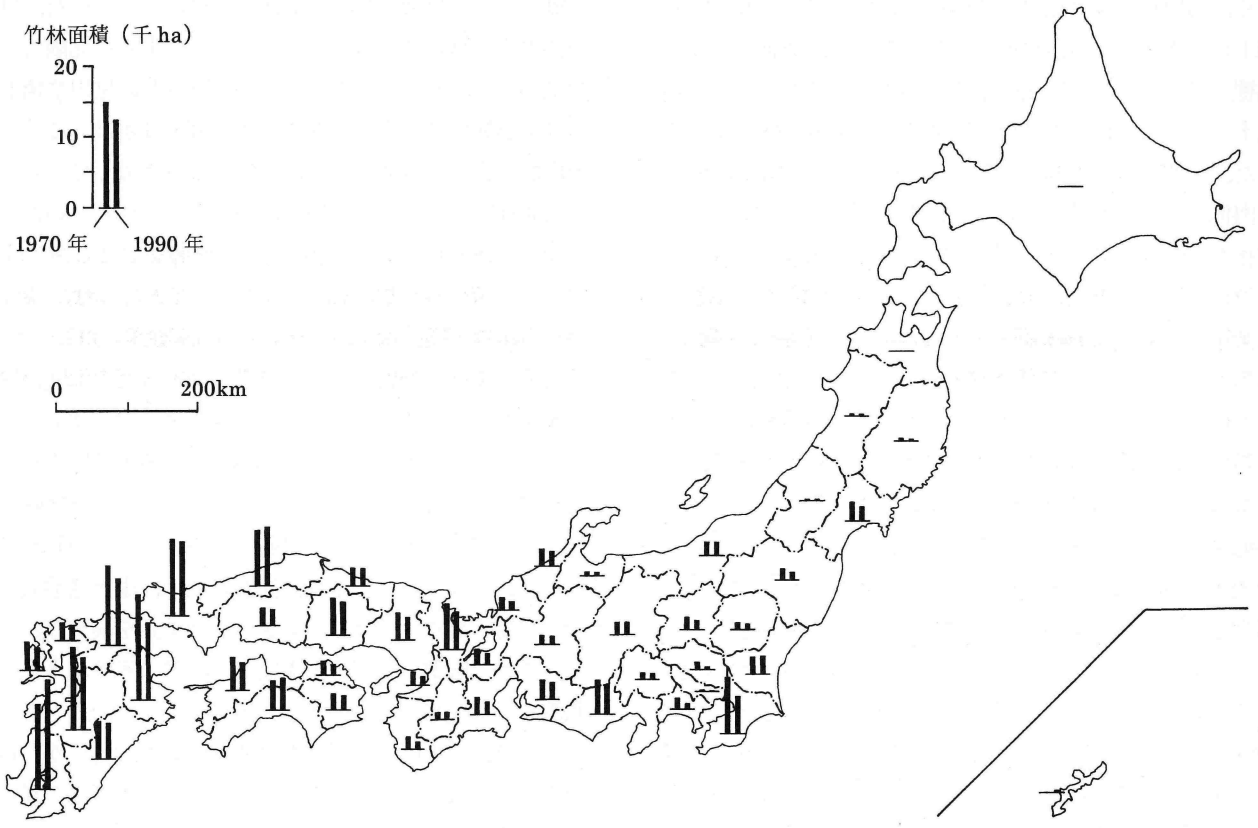
このように竹細工には，器材としてもつ竹の本性からして本来的に合理的な用の美と神秘的な質の美が求められてきた．こうした遺跡は，福島県の荒屋敷や福井県の鳥浜などでも見られるが，縄文時代の交易を勘案すると宮崎県の日向天下や浄土寺山古墳の竹櫛等と異なり自生の竹材を用いたか否かは定かではない．沖浦和光は，塩土老翁の玄櫛や，船籠，箕を指標として記紀の日向神話を論究し，竹文化と隼人（熊襲）の関連を論究し，薩摩の阿多隼人にその源流を見出している（沖浦　1991）．

この日向，大隅，薩摩の地は竹材も豊富で古くから農林漁業が栄え，南方との交易も行われ，自然と竹工芸が生まれてくる地域構造を有していた．これは，鹿児島県歴史史料センター黎明館のうけ（筌）を始め，梁，ひび（簀），び

＊日本社会文化専攻・地域構造講座



第1－1図　製品類型別竹細工産地の分布
平成7年度版全国伝統的工芸品総覧より作成



第1－2図　竹林面積の地域別変化形態
世界農林業センサスより作成
注）沖縄県の1970年はデータなし.

く（魚籠）等の漁具，箕，笊，籠等の農具，養蚕の棚や籠，竹筒，竹刀等の山具といった民具の豊富さにも現れている．阿多は，薩摩半島の西岸にあり，其の南の東岸には，知覧が位置する．この薩摩半島も鹿屋や垂水のある大隅半島もこうした鄙の竹製民具の産地としては衰微し，携帯用雨具と提灯を兼ねた知覧傘提灯が富永氏によって生産され続けられているにとどまる（第１図）．

薩摩半島の北に位置する山間の宮之城町では，こうした竹細工産地の名残が見られる．一つは，企業化した鶴田町の荒木竹材工芸に組織された13人の職人によって保持されている手作りの竹製垣根である．もう一つは，宮之城町屋地の鹿児島県竹製品花器協同組合に属した61人７企業からなる竹製花器の一大産地である．西の薩摩に対して東の姶良郡も竹製物差しで培った教育委員会等を媒体とした基礎市場を活用してカヌー生産に参入して，中国等との国際工程分業で存続する物差しと同様に国際中堅企業の地位を保持したランドワークスと隼人町の薩摩藩の弓師東郷家の流れをくむ桑畑　大弓製作所と桑畑正清　大弓製作所が残存しているが，産地形態はとっていない．これは，同じ島津藩の弓の産地であった日向の都城も同様である．ここでは都城弓製造協同組合の下に14企業19人の職人が残存し，真竹を用いた大弓を生産し，産地の面影を保持し続けている．天孫降臨で大和と熊襲の出会った高千穂の地にも大字岩戸に竹籠のかるいをつくる職人が残存し，竹細工にまつわる大和と熊襲の関連に思いを馳せる糸口を与え続けている．

隼人は，大和政権の確立につれてしだいに大和にも移住し始め，宮廷工芸の誕生した５世紀末にはその工芸細工にも寄与していたと推測されるが，日本書記の天武11年(682年）７月の条に阿多と大隅の隼人に言及されているように隼人の移住が一般化した．天皇家の守護や宮廷の工芸細工に用いられ，養老律令職員令28の隼人司や延喜式の隼人司の条に見られるように畿内隼人としてこれらは定住し，竹林の造営と竹細工の産地形成を主導した．大嘗会の儀式用のいりこ（熟笥），あぶりこ（煤籠）にしろ，年料の薫籠や和紙のす（簀）にしろ鄙の細工が，天皇や宮廷の需要と結合して都の細工へと向上してゆく地域の構造の内に竹細工が取り込まれたことを表徴している．紀の川の沿いの五条の上流阿田は，この畿内阿多隼人の故郷とされ，竹屋垣外の近くの宮滝には吉野離宮がある．この北にある金剛山，葛城山，二上山へといたる，飛鳥の西麓は，二上山の竹内峠や竹内街道に現れているように竹林の美しい地帯をなす．この北縁は，京都田辺町の山城の大住に至り，畿内大隅隼人の故郷とされている．奈良の生駒もこの地帯の一画を占める．

五条の下流紀の川沿いの橋本は，明治時代に二代目竿正が考案し，弟子の竿五郎が高野竹を用いて完成させたへらぶな用竹製継ぎ竿の一大産地である．ここには，紀州製竿組合の下66企業69人が就業している．この北では，金剛山，葛城山麓の竹材を用いた河内の富田林や河内長野の簾や竹細工の産地が残存している．富田林の大阪簾工業組合には24企業240人が所属し，飛鳥時代以来の伝統的銘柄性と宮廷や将軍の御用達を踏まえ，神社・仏閣の需要も用いて都の簾産地として確立してきた．大阪阿倍野の天王寺の全日本竹製品振興協同組合に組織された籠職人（10企業18人）も，伝統と都の需要を基に鄙の農具としての籠から，炭籠，盛り籠，花籠へと製品の高度化，工芸化を進めて産地として存続している．

こうした都の竹工芸産地の中枢は，前論（宮川　1993）で述べた京都である．大隅隼人の移住地とされる山城の国大住郷（田辺町大住）は，日本有数のモウソウチク産地で，山城の白子として銘柄性を確立した筍の産地でもある．京都の竹工芸は，都の産地としての複合性と多様性を有し，大和・山城だけでなく丹波・近江・若狭の原材料とも深く関連している．これらを基層産地として組込みっつ残存し，これは，その生産流通の中枢性を高めてきた．京都竹材商業協同組合や京都竹工芸品協同組合に組織された47企業，280人（年産2,100百万円）は，その典型で，京都が都として育てあげた茶道・華道・香道と深く関連してその工芸性を高めてきている．天皇や公家に支えられた貴族文化だけでなく平安・鎌倉．室町と培われ室町に確立した京都の武家文化もこれらの基礎をなした．室町・戦国・徳川と豪商を中心に発達した町衆文化がこれに深みと多様性を与え，地場市場を形成するとともにその中枢性を高めた．

江戸末期には50軒からなる弓座をゆうしていた名残の京都の和弓（１人），各藩の御抱え弓矢師を源とした矢師（３人）や公家の遊具を起源とした京竿（４人），奈良に起源を持ち京都で発達した京扇子・京団扇（195企業，998人，1,796百万円ー扇子，169百万円ー団扇，京都扇子団扇商工協同組合）京筆（９企業，20人，90百万円）は，こうした竹工芸の典型例である．竹と紙との複合は，神社仏閣と関連した京提灯（４企業，19人）や京和傘（２企業，５人）がある．これに漆を加えた京葛篭（２企業，５人）も複合的工芸産地としての京都の竹工芸産地の特性を示している．また，竹工，木工，金工，漆工等を一人の職人がこなしてゆく，古典雅楽器（６企業，15人）は，こうした高度の工芸性に支えられた中枢産地を典型的に示している．

中枢産地としての京都の周辺産地を形成しつつサンカの文化が関係したものとしては，壇寺竹細工がある．其の他にも亀岡の毘沙門竹細工，山城の田辺茶筅などもある．綾部の壇寺竹細工については，岡村（1957）の綾部市における壇寺部落の竹細工工業についての人文地理学的考察がな

されている．だが，1952年に出された住民登録令との関連や1945年の兵役法施行規則改正，44年の国民登録実施，1939年の国民登録制度施行・国民徴用令実施による1938年の戦時体制下での国家総動員法の具現化による山間の漂泊民としてのサンカの掌握には充分言及されてはいない．明治維新を契機に1870年に平民に苗字を許し，72年に戸籍簿（壬申戸籍）に記載した．1870年の中小学校規則に始まり，86年の小学校令，1907年の小学校令改正（義務教育6年制），1918年の義務教育国庫負担法と義務教育は進展した1837年の徴兵令公布，千島樺太の日露交換協定が締結された75年の徴兵令改正により国民皆兵は深化にした．こうした国土・国民から成る近代国家形成の枠外に置かれた漂泊民と竹細工職人との関係は，柳田等の先駆的研究はあつたが，あえて言及されなかった．1582年の太閤検地と合わせて行われた戸口調査による検地帳の名請人や1613年の禁教令，15年の諸宗諸本山法度を踏まえた39年の宗門改めでの宗門人別帳との関連も触れられてはいない．これは，箕を始め竹細工を生業としていた山間の産地集団をサンカとのみ関連ずけて産業地域社会論として論ずることの学問的危険性をも示唆している．

壇寺の竹細工は，古文書を基とした伝承で，939年の天慶の乱で敗れた平将門の落人で空也上人の門流となり諸国を巡礼し，布教したものが始めた．そして，菅原道真の祠を北野に建立した947年の天皇・上皇の罹患した疱瘡などを契機とした都の疫病を勅令をえて祈願して，王服茶を茶筅で点てて平癒させたとゆう故事にならって，竹細工を生業として定住したことでこれは生まれたと言われる．この人々は空也堂を建立して，京都の紫雲山光勝寺を本山とした空也念仏宗徒として定住した．大和の鉢や出雲の鉢屋と同様に丹波の茶筅と称される地域社会集団がこの竹細工産地の基層をなしていた．其の製品は，養蚕具を中心とし1933年には，17戸32人（男子17人）で産地を形成し，徴兵で男子職人7人に減少した1944年も海軍の炊事用具の生産で18戸22人の産地を保持していた．戦後は，49年に23戸36人（男子28人）で箕や笊・籠など地場の生活用品を地場の由良川の防水竹林を原料に生産し，行商で地場に販売している．

この戦後の復興期には，大阪商人による九州・四国産品の調達で地方産地と大都市圏産地との産地間競合が生じた．これが上述した河内の下請け産地として，壇寺を輸出用簾や花器の生産に転換させ始めた．器材の購入を可能とする資本の地場蓄積はなく，京都の下請け素材産地化した近江の安曇川の高島扇骨産地（41企業　422人　1,949百万円）とは異なり小規模産地に止まり，これは農業雑器生産（2企業2人）の零細産地へと衰微している．上述した壇寺での発生の伝承は，別論（宮川　1989）で述べた木地師と同様にその血縁・地縁集団の結束の紐帯（イコン）として機能してきた．

竹材の豊富な近江は，草津の竹根鞭細工（2企業　5人）や染めと漆を用いた唐物網代細工（1企業　2人）のように伝統工芸も都の京都への近接性の故に残存した．その一方地場の農村需要に東海道の街道需要を加えて，甲賀の竹笠をもととした食器用竹皮産地（2企業　60人）や彦根市多賀敏満寺地区の茶摘み籠産地の名残（1企業　1人）も鄙の産地から染色工芸化して残存している．伊吹山麓の京都伏見の技術の流れをくむ伊吹の竹刀産地（3企業　3人）や舞台提灯の長浜提灯（1企業　1人）もこうした京都の周辺産地性を示す．

兵庫では，京都と一時的に遷都された平清盛の福原の都の間に在って古くから開けた有馬温泉に有馬籠産地（10企業　65人　20百万円）が発達した．これは桃山文化を吸収しつつ茶道具・華道具産地として確立し，残存してきている．有馬温泉の観光需要は，農家副業で農具を基礎としていた摂津に隣接する美嚢郡吉川の美吉籠産地を明治以降民芸産地（1企業　13人）に転換させた．この転換は，別論（宮川　1996）で述べた民芸産地化の機構の一端を示している．

上述した京都に比べると奈良は，他の伝統工芸品と同様に，古都としての存続年限の短さや寺社仏閣の中枢性の相対的脆弱性から，竹細工も春日神社と関連した奈良団扇（1企業6人）と古都奈良を表徴する奈良墨（15企業　420人　1,850百万円）と一体となった奈良筆（41企業　195人　950百万円）が展開するのみである．奈良筆は，奈良からしだいに大和郡山へと拡散している．この奈良と河内・山城の間に位置するのが本論で対象とする生駒の高山茶筅産地（31企業　277人　380百万円）である．これは，全国の9割程度の生産流通を支配する中核産地をなし，その存続機構の内に後述するように高山竹茶道具産地（12企業　25人）を派生させている．

高山の茶筅は，茶筌と称して差別化し，六波羅密寺を建立した踊り念仏の空也上人（930—973）の弟子定盛に起源を求めた出雲等の煎茶茶筅とは，後述するようにその社会的基盤を異にしている．出雲は後述するように今日でも高山茶筅の原材料供給地の一つであるが，木工芸や石工芸に比べ，竹工芸は産地としては残存していない．敢えて取り上げるとすると，江戸時代に起源をもち和紙工芸と関連した大社の祝い凧（1企業　3人）がある．畿内と隼人の地の間にあって出雲は，ボテボテ茶や母里焼の茶碗の作陶にも見られるように工芸において社会文化的に独自の地域を松平直政の統治下で確立している．それだけに竹細工産地がないという事実は興味深い．

山陰では，京都により近い因幡の鳥取と出雲に近い米子

の中間にある伯耆の倉吉を中心とし，地場の真竹の編物と黒竹の丸竹細工を特色とする鳥取県竹産業振興会を中間的組織とした広域産地（15企業　60人）がある．山陽では，苦竹を晒さずに青竹のまま用いた農具から花器へと製品転換をおこなった美作の勝山竹細工産地（16企業　16人　25百万円）がまず挙げられる．出雲と同様に木工芸に秀でた安芸では，江戸時代後期に農家副業から産地化した内陸の熊野筆産地（134企業　3,070人　5,000百万円）とそれを補完する臨海の川尻筆産地（57企業　690人　2,000百万円）がある．しかし所謂竹細工産地は備後や石見同様に残存していない．山口でも周防にも長門にも竹細工産地はなく，出雲と同じく畳6畳もある勇壮な祝い凧産地の萩見島楊子産地（2企業　2人）が残存しているのみである．

中国地方に比べ四国地方は，前述したように竹細工産地として江戸時代以来形成された産地が多い．特に大阪に近い阿波は，大型笊産地の徳島の富田浜に代表されるように戦後復興期（約400軒）に倍増し，産地の存続機構を形成しえた．このために富田浜産地（26企業　23人　200百万円）は残存しえた．この産地も農家副業から下級武士内職をへて士族内職を基礎に発展し，大正期（200軒）に産地基盤を確立している．一方，明治期から大正期に適応できなかった吉野川沿岸の真竹と和紙を用いた徳島の阿波張行李（1企業　3人）や阿波奴凧（2企業　5人　全国の半数の印刷凧生産）産地，そして中流の美馬の郡里の和傘（2企業　2人）もある．

讃岐では，白井竹器工場（20人）に企業化して残存した長尾の江戸時代以来の繊細な編み上げ技法を伝承した花器・茶器生産や金毘羅神社や四国88霊場巡礼と結び付いた高松と観音寺の讃岐提灯（2企業　8人），高松商人が岐阜より導入した高松和傘（7企業　11人　67百万円）もある．だが，産地として素材転換をしながら残存しているのは，江戸より導入され下級武士内職と地場需要を基盤とした丸亀の団扇産地（67企業　508人　4,693百万円）のみである．

和紙産地の多い四国では，川之江の簾の生産にみられる竹細工が工芸用紙漉きを支えに新居浜で伊予の簾や小松の久米本店（2人）の渋団扇のように個人に伝承されて残存している．また，真竹，女竹，虎斑竹の素材で黒染色やちゃら編みの技法を開発し，城下の需要を活用して工芸化した花器・茶器として残存した松山の伊予竹工芸（3企業　55人　400百万円）のような企業形態もある．同じ黒潮に洗われる隼人の地の如く，漁具や農具を基礎に発展し，今日まで果物籠に製品転換して産地として残存するのが，土佐市の土佐竹細工産地（70企業　100人　200百万円）である．

九州北部では，複合的地場産地として名高い八女がある．ここに江戸時代以来，孟宗竹・苦竹を素材に巻ぶち技法を開発し，飯籠，味噌濾しから花籠・盛籠へと製品転換した竹細工（5企業　11人）や立花藩の御用達で基礎をつくた八女矢（6企業　18人　3千万円）がある．これらを基盤に和紙産地と結合した八女提灯が今日では中核産地（27企業　275人　2,700百万円）をなしている．

佐賀では，農家副業と温泉需要に支えられ武雄の三角形に面取りした細竹を編んだ長方形の万石ぞうげ笊に特色ずけられた西川登の竹細工産地（6企業　6人　5百万円）がある．長崎・壱岐・五島と凧作りは見られるが竹細工産地は，ここにはない．天草凧のある熊本も，宇土提灯（1企業　2人）や鹿本の来民渋団扇（1企業　10人）が残存するものの産地としては，花竹，竹樽・竹柄杓を基に有馬からの技術導入した八代の竹籠産地（10企業　11人）程度である．室町以来とされる温泉需要を基とし，国際製品・工程分業で存続する別府の大規模竹細工産地（101企業　274人　304百万円）に匹敵する産地は熊本にはない．

竹細工は，工芸品としては高価なものもみられるが，一般的には生活用具としての需要を基礎としてきた．それだけに，その銘柄性の構築には，後述する千利休による茶器・花器としての採用など独特の契機を不可避としてきた．それ故，こうした契機が族生し，高級品需要も相対的に多い都は，鄙に比べ竹細工の日用品から工芸品への移行を主導し，円滑にする機構を内包している．

上述した畿内の京都と社会文化的伝統・風土を異にする関東の江戸は，複合的伝統工芸品産地とはいえ，その展開の様相を異にしている．東京製簾協同組合に組織された江戸簾（15企業，24人　260百万円）があり，萩やよしとともに竹が素材として用いられ，内外掛簾だけでなく，御翠簾も生産されていた．これに遅れ江戸竿も享保年間には生産され始め，味わい深い漆塗りの名品も多く，台東区等城東の零細地場産地に東京釣用品協同組合（38企業　44人　210百万円）に組織されて展開している．武士・町人の需要を基礎とし，元禄期の細井広沢の練りまぜ法などの技術革新を主導し，名品を生み出してきた点では，同じ城東に展開する江戸筆（26企業　88人570百万円）も同様である．しかし，今日では，其の他の竹細工は残存せず，提灯・弓矢・物差し等は其の外延をなす，東海道沿いの小田原や伊勢原に展開するにとどまる．提灯（2企業，5人），弓矢（2企業，4人），物差し（2企業　21人）の何れも，2企業で，産地を形成し，存続させているとは言い難い．

江戸に近接し，竹材の豊富な農漁村を有した千葉も同様で，佐倉城主が江戸より茶人を招いたのを契機として発達した真竹・女竹を素材とし漆塗りの江戸風の下総竹細工も中台一司によって継承されているにすぎない．茨城県産の素材で，宇都宮藩の弓術の流れをくむ同じ佐倉の和弓用矢も鳥山真が製作しているだけである．同様な事は，石塚栄

の伝える佐倉と江戸の間の関宿の竹宝竿についても言える．江戸の技術と房総の竹材を基とした竹細工としては，銚子竹簾（1企業　9人）と館山の房州団扇（9企業　125人　152百万円）がある．零細産地としては，広域的ではあるが，天明年間に青木村の増田繁次郎が布袋竹を用いて製作したのを起源とすると称されている川口の竹釣竿（25企業　35人　153百万円）がある．文化的には江戸との関連の深い甲州であるが，竹細工産地は残存していない．

江戸と京都の間では，東海道沿いの徳川家康の隠居した駿府で江戸時代に全国有数の竹細工産地が形成され，竹千筋を巧みに編んだ技法で工芸化を遂げて，今日でも産地（35企業　94人　205百万円）として残存している．徳川の直轄地は全国から職人が集まり，全国の原材料・製品市場と結合し，地場産地形成を促す機構を持つ．甲斐武田を源流とする焼津の小川の矢や矢筒の産地（14企業　36人　120百万円）も同様な機構で産地として残存してきた．この背後の信州は，木工細工と異なり中山道や甲州道沿いには残存していない．脇街道の飯田街道沿いでは伊那谷の根曲り竹を用い，農山村の用具を農家副業として生産してきた信州竹細工産地（59企業　59人　37百万円）がある．こうした副業生産としては，下伊那の喬木村に残る阿島傘（1企業　7人）もあり，木・竹細工の棲み分けがみられる．

江戸と京都の間にある親藩尾張氏の城下町の名古屋も城下としての複合地場産地（宮川　1977）を形成する．城下起源の竹細工としては，京都の井上勘造が伝承した名古屋扇子（18企業　70人　1,100百万円）と京都と江戸の中間的特性を示す名古屋提灯（14企業　60人　970百万円）があるが，その生産は次第に拡散している．竹細工産地としては，今日この名古屋大都市圏の外縁をなす豊橋の筆産地（83企業　375人　2,250百万円）や岐阜提灯（34企業　139人　10百万円）が有名である．

岐阜には，加納に藩の庇護と美濃の和紙を用いて古くから全国的な技術中枢性を持った和傘産地（8企業　100人　300百万円）が存続し，京都の技術を継承した岐阜渋団扇（1企業　2人）も前述した丸亀の骨を導入して残存している．この外では，飛騨古川の提灯（1人）や伊勢の提灯（1企業　2人）が地場の需要と結合して残存している．伊勢と名古屋の中間で東海道にも近い四日市の日永にも伊勢神宮参拝用の丸竹と64本と多い骨数，美人画を特色とした日永団扇（1企業　3人）が生産されている．

東海の背後をなす北陸では，京都により近い越前に歴史の古いみだれ籠や文書籠に特色を持つ越前竹細工（6企業　15人　5千万円）が今もつて残存する．だが，これは京都の工芸の影響を強く受け，藩の細工所による美術工芸奨励策で技術・技能の高められた金沢に比べると民芸的色彩が濃い．前田藩の殖産とも関連した加賀の和傘（1企業　1人）や提灯（9企業　12人）は加賀竹細工（4企業　5人）・加賀竿（1人）と同様に，工芸化しただけに高級品として存続しうる基礎を与えられてきた．

富山では，農漁村の中心をなす氷見の米あげ笊・そうけを基礎とした三尾竹細工（40企業　40人　2百万円）が産地をなす．同様の立地基盤は，幕府直轄地の佐渡でもみられ，佐渡竹細工（30企業　50人　82百万円）も地場の篠竹等を用いた笊・籠を基礎とし19世紀に北海道の口きり笊需要に励起されて発展している．陣屋の置かれた港町の新潟には，独特の竹塗り産地（12企業　25人　6千万円）が発達し，背後の見附（1企業　25人）や長岡（2企業　31人）では士族内職を基礎に形成された筆産地が名残をとどめている．

農家副業や士族内職と結合した竹細工は，竹材の全国化とともに蝦夷の卓越してた東日本にも展開し，江戸時代には普遍的な立地をみるに至った．岩木・弘前の林檎産地を基礎とした津軽竹籠産地（13企業　19人　1千万円）や南部の二戸竹細工（4企業　66人　45百万円）はその一つである．二戸竹細工産地では，藩の技術奨励策もあって鈴竹に根曲がり竹を組合わせ民芸風の笊・籠を製作してきた．

伊達藩では，藩祖政宗も愛用したと称する城下の仙台竿（1企業）とその前任地岩出山の篠竹を農家副業で加工した篠竹細工産地（100人）とがある．伊達の仙台に対し独自の文化中心をなした佐竹の秋田では，城下の竹細工はなく，奥羽山麓の六郷に農山村需要と結合し，背負い籠や熊手もつくる竹細工（1企業　4人）が残存している．養蚕用具と結びつき真竹を用いた竹細工は，山形（1企業　3人　5百万円）でも残っている．山形では，藩の殖産政策で産れた和傘（1企業　2人）も昔の面影を留めている．福島では内陸の会津や中道りでは竹細工は残らず浜通りの平藩での弓矢作り（2人）が残存している．

福島の南の茨城でも八郷に八郷竹矢（2企業　3人）が残る．また水戸光圀の竹栽培・竹細工奨励策と結び付いた孟宗竹・紋竹・黒竹・虎竹・媒竹・胡麻竹等を駆使した日立竹人形（1企業　2人）や水戸の涸沼竿（1人）も伝えられている．栃木の那須も竹材が大規模に栽培された地であるが，大田原の茶器・花器の竹細工（8企業　8人），烏山や宇都宮の竹釣竿（各1人）や農家副業を基に民芸化した那須の篠工芸（1企業　9人），馬頭の寒竹工芸（1人）が散在し，市貝では箕の生産（1人）も残っている．しかし，さらに内陸の群馬では，竹細工の残存は見られない．

上述したように竹細工の展開は，竹林の自生・栽培の空間的構造と職人の社会・文化的構造の織り成す風土文化と産業地域社会の産物である．歴史的には，河川や山麓での災害の地域構造と防災の地域計画と関連して進展した竹林の造成を基盤として誕生した竹細工産地も少なくない．ま

た産地の形成には，地域の構造を踏まえた藩の殖産政策や藩の農村対策の所産としての産業地域計画が関っている場合もある．さらに，竹細工産地の残存形態は，別論で述べるように産地の規模と集積の過程，生産流通構造の確立，地域の計画の進展にともなう地域の構造の変容とが深く関連している．そして，鄙の農山漁村を基盤とし，笊・籠等の日用生活用具を基に発展して，集積にともなう独自の生産流通構造に支えられ，工芸品を組み込みつつ残存する地方産地と京の都の影響を受けつつ茶道・華道等の都や城下町の需要に支えられて工芸産地化して残存してきている畿内周辺産地とに分化してきた．しかし，竹細工業は，代替商品の開発と長時間低賃金労働・低付加価値に伴う日用生活用具としての竹細工の衰微により，都の工芸と鄙の民芸が重層化しつつ，一部国際製品・工程分業を取り込みつつ残存してきているとも言えよう．

上述してきた竹細工産地のなかにあって，生駒高山の茶筅産地は，畿内での竹栽培と竹細工の社会文化的原点をなした吉野の阿陀と山城の大住の間にあった．そして竹林の豊富な奈良と京都の二つの古都を結ぶ街道にも近く，大津と難波の都の間にも位置し，別論（宮川　1997）で述べた茶道の興隆に絶大な影響を及ぼした織田の安土と豊臣の大阪の城下の間にも生駒はあった．本論では，この生駒高山の茶筅産地が，全国の中枢産地として確立しただけでなく，他の竹細工産地とは異なり茶筅の大半を生産する特異な地場産地として存続してきた機構を産地の位置する地域の構造と地域の計画に留意しつつ，その産業地域社会の風土文化と構造革新の機構に着目して論究してゆきたい．

2　茶筅工芸産地の形成と血縁・地縁集団の構築

茶筅は，日本後記の弘仁6年（815年）に僧永忠が嵯峨天皇に茶を献じているように，遣唐使文化として日本にもたらせれた茶を点てる道具として発達してきている．この茶筅の端緒は前述した空也の弟子・定盛による煎茶をかきまわす出雲のぼてぼて茶の茶筅に類似したものとされており，その形態の一部に類似性が認められる．現在の抹茶法は，1168年に栄西によって宗より導入されたとされており，室町に入り茶道が形成されるにつれて編み糸で下段を縛った中曽司茶筅が誕生し，奈良県橿原の中曽司地区につたえられた．このように，これは空也堂茶筅と異なり，先端は抹茶に合わせて割り竹で撹拌し易いように結ばれてはいない．鎌倉・南北朝・室町と次第に一般化した喫茶の習慣は，茶の品当ての闘茶の遊戯を生み，更に庶民階層にも普及し茶筅需要を増大させていった．

奈良の町寺称名寺を出て京都にのぼった村田珠光（1423—1520）は，応仁の乱（1467—77）頃にはこの闘茶の判者をし，連歌師として諸国を行脚しっつ喫茶の風習，特に都の奈良や京都の町衆に流行していた「下げの茶」への関心を高めて行った．こうした古都や堺等の新興の町衆需要を加えて，茶道を構築してゆくにあたっては，足利義政とともに書院台子の茶儀を工夫していた能阿弥より点茶の方式と座敷飾り・茶道具の目利きを習得し，一休宗純の禅の精神を学んだことが大きく寄与している．村田は，貴族と庶民の喫茶の様式を統合し，武家文化にも合致した和合同心を醸し出す四畳半の茶室を考案し，茶道具も外見は粗相ながら内面は清純な総合的美観を重んじ，現在の茶筅の美観の基礎を造った．

この茶筅は，村田珠光の発案で武家出身の連歌師で奈良の水門町に居住していた入道宗砌（—1455）が考案したとされている．宗砌は，種玉庵宗祇伝によれば但馬国守護山名氏の家臣で1500年に亡くなった鷹山城主鷹山大膳介頼栄の次男時重で，応永年間には出家し，前述した阿陀の里にも近い高野山に居たことが，初心求詠集によって知られる．そして永亨5年（1433年）の将軍足利義教が山名常熙を奉行として催した北野句会に参加しており，京都に草庵をむすんで山名宗全等と連歌を楽しんでいたことは，山名正撤の草根集によっても知られてはいる．しかし，高山八幡宮の宮司山崎清吉が『高山茶筅志』（風土社　1976）で議論しているように没年からしても村田珠光と高山宗砌との茶道を介した交わりと茶筅製作の依頼の確証はない．しかし，村田珠光を通じて京都の珠光庵で後土御門天皇に宗砌の作と称せられる高山の茶筅を献上し，「高穂」の御名を賜ったとされる．このことから鷹山頼栄とその子頼秀・頼春の代における高山茶筅の銘柄性の確立にこの伝承が大きな契機を与え，鷹山の細く堅い淡竹を用いた茶筅生産を生み出した事は推察しうる．

鷹山は，清和源氏頼光の後裔を名乗った鷹山氏が，南朝に武功の廉で興福寺の僧兵として1万8千石を与えられ，中心の立岩山の尾根の先端にある和田山に館を置き，開いた富雄川を挟んで耕地が広がる地域であった（久保1978）．和田山の南には茶筅の祖・高山宗砌の碑のある東大寺の別院・法楽寺を配し，北に歴代の墓地のある円楽寺等を置き，高山八幡宮を奉った東には東大門を，親戚の田原坂上氏の治めた生駒谷に向けては和田・前田の境に西大門を築いた．この鷹山は，前述したように奈良・京都・大阪の三国境の要衝の地でもあり，奈良や京都だけでなく，新たに茶道の中心として興隆しっつあつた堺へにも便利な土地柄であった．しかも，土地は砂礫が多く，痩せており，防災上も竹林を保持し，拡充するのに適していた．

こうした地域間の空間的構造と茶道を生み出した社会文化の歴史的構造が，帰郷した宗砌による秘伝としての領主・家臣への伝授による茶筅の銘柄保持を可能とし，宗砌

という主体の地域産業計画と結び付いて鷹山を茶筅造りの里として生み出してきたとも言えよう．秘伝として領主高山頼春自らも参画して茶筅を生産し，それを茶碗や茶器と同様に天皇・公家や将軍・大名への献上品とする事で，「高穂」としての高山茶筅の銘柄性を保持した．そして，上述した竹の持つ霊力や美観の全てを表現したとする茶筌としての命名を行ない，それを伝承することで従来の茶筅との製品の差別化を確立していった．

この銘柄性の確立と秘伝としての技術の閉鎖性が，高山氏が織田信長との戦いに敗れて所領を没収された後も士族授産による茶筅師として残存することを可能とした．これには，天正16年（1588年）秋の豊臣秀吉による京都北野の大茶会に統領高山頼盛が茶筅百本を献上したことも深くかかわっている．そして，堺の町衆武野紹鷗の弟子で茶頭となつた千利休による花器や茶杓の竹工芸に触発された茶筅の様式の多様化が需要の増大と技術の向上を生み出し，茶筅の里の構築をもたらした．こうした消耗品としての茶筅の技術と需要の構造の高度化を更に促したのは，秀吉の逆鱗に触れ断絶した千家を再興した孫の千宗旦の３人の子供による表・裏・武者小路の３流派の創設に始まる茶道の分化とそれに伴う各宗匠の好茶筅の誕生である．

この茶筅師の血縁集団は，徳川時代に京極丹後守に仕官して高山頼茂以下一族が宮津に移住する際に高山に留まった16人衆に茶筅の製造・販売の特権を与えた事で確立している．こうした茶筅師は，所領・知行・封禄の無い無足人ではあるが，同じ織田信長の攻略にあった伊賀に始まり藤堂氏の津藩とその所領で確立した苗字・帯刀した武士の名残と誇りを保持した．そして，高山茶筅の銘柄性を高めるため，「南都両院御礼株記　和州高山村無足人座」の記述にみられるように高山八幡宮の祭祀を活用して拝殿の下神楽殿の左右に並ぶ小字の平座に対して，拝殿の西に宮座としての無足人座を置き，家臣集団を基盤とした血縁集団としての技術の閉鎖的伝承と銘柄性の堅持に努めた．無足人座の結束は，頼茂の７男で七の助が出家して大仏殿を再建した公慶上人となつた東大寺とその姉教誉清心尼が第４代住職となった興福院への年賀等で高められた．この無足人座のなかで，茶筅師はその中核をなしたため茶筅座とも称された．

この茶筅座の存在と高山茶筅の銘柄性の向上，そして高山茶筅の拡販には，大阪朝日新聞(大正６年11月26日附け)に掲載された記事にその一端をうかがうことができる．即ち，高山茶筅の銘柄性の更新は奈良奉行の命で上洛した３代将軍徳川家光に献上した際に始まる．そして，禁裏仙洞や将軍家や御三家用に京都所司代に向けて鳥羽・伏見街道を献上品の御用提灯を掲げて茶筅飛脚が走った事や，近松門左衛門のお夏清十郎の淀川下りの船中での茶筅売りの挿話にもみられような宣伝が活用された．

高山茶筅の多くは，和田山を中心とした字大北で製作され，北の傍示から間道を河内森に抜けて淀の渡しをへて京都寺町の茶道具屋に納められ，さらに宇治木幡の茶問屋へと納品され，地方の模造品との差別化が計られた．この家光献上の茶筅の形態に受け継がれた銘柄性が，元禄時代に宗旦の弟子山田宗偏・杉木普斎らによる町人層への茶の湯の普及とともに機能し，茶道の遊芸化に伴う家元制度を逆用し，濃茶・薄茶，茶碗に合わせた各流派の茶筅の多様化による存続基盤の強化を可能とした．

高山茶筅産地は，こうした基盤の存在と無足人といえ有していた田畑の処分と自家飯米田に支えられ，茶道の消耗品故の基礎需要を受けて細々ながら幕末の混乱期を凌いだ．この高山茶筅産地は，明治４年（1871年）の郵便規則の制定と廃藩置県による全国市場への小包便による配送の便の向上で全国からの注文生産に対応する形態を構築して，他産地の参入と成長を防いだ．そして，明治６年（1873年）のウイーン万国博覧会の体験を活かし，我が国の工業と技術・技能の向上・再生に大きな役割を果たした明治10年（1877年）の東京での第一回内国博覧会（宮川　1986）への出品で銘柄性を再興し，西欧文化興隆の中で新たな存続の機構を再構築していった．

この内国博覧会には，10名の決議で久保喜太郎と久保為造の二人が勧業博覧会出品総代として，茶筅を出品し，翌年に褒美と褒状をえている．この年には，全国的には古美術復興運動もおきて工芸への関心も高められている．地場では前述した南都大仏殿で催された和州・摂州・河内の三州の勧業博覧会にも出品し，褒美・褒状に加えて堺県より下賜金をえた．出品は，東京の場合と同じ両総代であり，産地の茶筅師集団の社会構造が確立していた事をうかがわせている．10名とは両総代の外は，久保伊太郎・久保友吉・久保栄吉・久保太三郎，谷村傳重郎，池田織象・池田平次郎の８人である．

前論（宮川　1995）で述べたように各県による産業調査と仲間組合結成による地域産業振興策に刺激され，明治１８年（1875年）には，高山村茶筅職仲間組合が11人の茶筅師によって結成されている．この仲間組合の記録では，前年の商法公布を受けて地方でも統計整備が進んだ明治24年（1891年）の生産は４万本で1,600円をあげていた．そして，日清戦争に勝利し，茶を楽しむ数寄者によって茶道が復興した明治28年（1895年）までには64,500本，3,612円と一本当たりの価格も多少上がり順調にその生産を拡充してきている．

この明治間に，その製作の場所も鴨居に槍のかかった母屋の口の間から明るく製作にも便利な母屋の畳敷きの部屋にかわっても，仕事場を他人に見せることはなく，口伝と

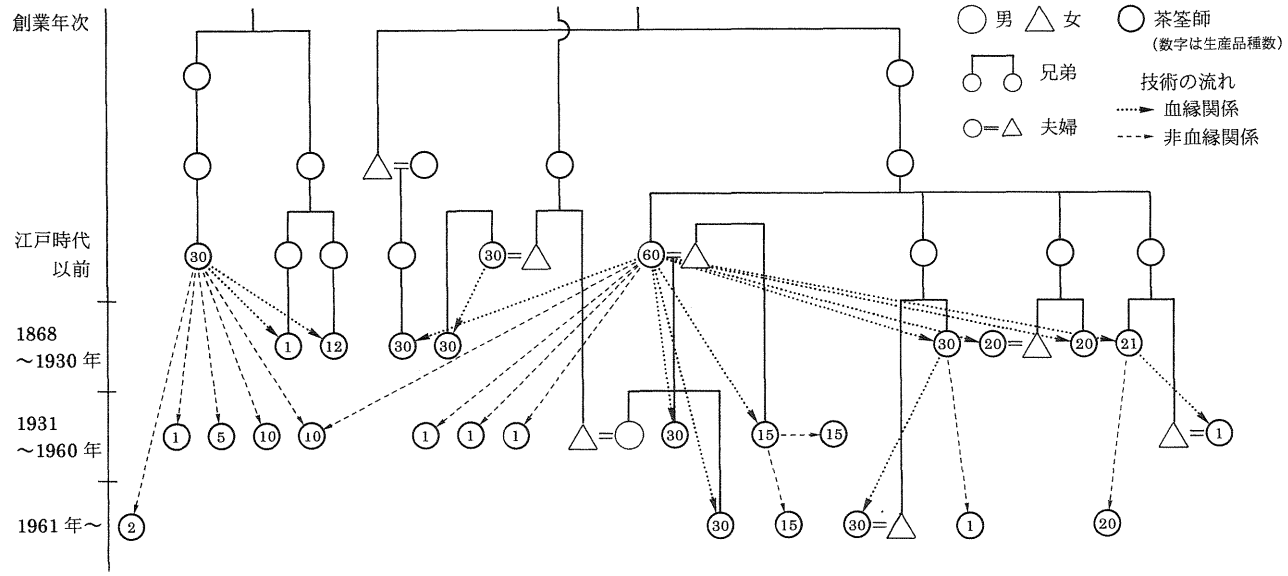
た久保英雄宅で谷村丹後の跡を継いだ谷村敬治等と技術の研鑽を積んでいるように茶筅産地の所謂中間組織が前論(宮川　1996)の砥部焼産地ほどではないが，技術や経営の情報の媒体として機能していた．この外にも茶筅師は，日三回の休憩時間に同業他者の家を廻り，擬制的家族としての血縁的結束を高めるとともに，技術・経営の情報の交流を図ってきている．無足人座の結束は，祖父為造が８６歳で死亡した時に東大寺より狭川明俊師がまいってきているように堅固なものであった．

茶筅師の労働は，繁忙期には一日15時間にも及び，夜業も一般的で，主婦にはとくに過重な労働を強いた．茶筅業には，こうした家内労働を前提として成り立った側面もある．母だけでなく，左文も過労で体をこわし，上述した戦死した久保英雄の弟で分家した正治も病死している．こうした生産労働形態が茶筅生産機構の内に自動的な生産調整機構を組み込ませていたとも言えよう．この明治・大正・昭和の間の物故者は，上述した久保為造，久保為業，久保英雄に加え，久保薫，久保伊一郎，久保義雄，久保金造，久保竹松，久保長太郎，久保喜一郎，久保鉄造，そして久保の縁戚の谷村弥太郎，谷村弥三郎，谷村七五三松，谷村兵松，谷村頼照，更に左文の独立を支援した祖父為造の弟子田中勝次郎と田中重郎の18名にのぼる．これが，上述した血縁集団による技術の閉鎖性を補完し，終戦時でも総数としては僅か４軒増えた15軒に茶筅師の数を留めていた．

家業性は，左文も記しているように，中学新卒（28円）を上回る工賃（35―40円）を５円の小遣いで済ませるように，家内労働力の内部化を経営の基礎としていた．しかも26歳で結婚するころまでに既に祖父から茶筅の種類・規格・特徴・製法を伝授され，ひかえ帳を有してはいたが，味削りなど完成品は，23代左京を継いだ兄とは異なり生産することも面前で行なうことも許されなかった．

上述した状況下での家出どうぜんに分家して夜業をして月50円の収入をえている．このことは，戦時経済体制に入った1937年頃には，別論（宮川　1977）で鯖江の眼鏡枠産業の存続を論じたようにこうした擬制的家族集団や血縁集団による家業の維持は次第に困難な時代になってきていたことを示している．この左文の独立には，父為次郎が田５反，山林５反，屋敷用の畑を分家のため遺言し，自家飯米の基礎を与えたことが茶筅存続の基盤となっている．このことは農村工業を論じる上で留意しておかなければならない．

とくに1936年の昭和北野大茶会，1940年の利休350回忌大茶会を契機とし大衆化した茶道愛好人口の増大と裏千家の淡交会（1940年）・表千家の千家同門会（1942年）による一門の組織化は，戦時にかかわらず需要の拡充を生み出した．この戦時の需要と戦時の召集・徴用による茶筅師や職人の減少は，組合の統制を弛め，地縁的職人の族生をもたらした．例えば，1941年に創業した菱本勝弘は，この一例である．菱本は前述した有馬の竹細工産地からの所謂渡り職人で，久保左京や久保修の下職を通じての技術習得で茶杓からの転業している．字久保出身の吉岡寉蔵も活躍した京都を頂点とした畿内の竹細工産地間の構造と工芸産地化の過程の一端をこれは示している．明治期には京都・大阪の張り染めの生産流通構造に支えられ，茶筅とは棲みわけて，竹箸から伸子業が両都市での奉公明けに帰郷した仲買人によって庄田を中心に発展した．この伸子に参入し，更にこの時期に茶筅に転業した者もある．これらは，家の職業が農家であるだけでなく，自らも農業を行っていた．



第３図　高山茶筌の血縁・地縁集団の形成（実態調査より作成）

この所謂農家副業としての高山竹細工産地の基層構造がこうした時代的構造変化が生み出した参入の契機を好機として参入し，茶筅工芸の存続を可能としている．高山ではこうした農家副業を基盤とした竹箸や伸子の仲買人が蓄積した資本で針打機等の開発して機械化し，且つ工場生産化した伸子業が大正以降増大した．そして，戦時体制下で統制外であったため伸子業から転業が進んだ編み針工場の工員に農家の次三男を吸収していた．これも，戦時体制下から戦後混乱期における茶筅師創出の母体をなした．

上述した久保左京・左文の兄弟と婚姻関係で結ばれた谷村丹後，そして久保喜太郎の４人が茶筅の組合の中核をなした．これらに高山家の家臣で無足人座の中心をなす４軒に，高山村茶筅仲間組合の結成に参画した７軒の末裔を含む13軒が昭和初期までには創業し，大北の集落を越えて北の庄田と南の宮方に展開している．そして，これらは，血縁集団の強化を図る一方で，久保左京，左文の兄弟と縁戚の西田虎造，谷村守等が技術の伝授を通じて地縁集団を取り込つつ，茶筅産地の拡充を進めている（第３図）．

第二次大戦後の民主化の動きは，伝統的地域社会を仲間組合規約で制度的に守護してきた高山茶筅産地にも上述した戦時体制下での変化を踏まえ，その社会経済構造を変革させた．農業の基本と農家副業の存在は，伝統工芸の都京都の温存と雑貨工業の中心大阪の復興に支えられて，農家出身の復員兵を吸収し，京都・大阪・奈良に囲まれた山間の地場産地の復興を可能とした．このなかには，終戦の年の45年の中田利男や戦後のガチャマン景気に大阪の繊維産業が沸いた47年の吉田信一のように，茶筅業へと参入したものもある．

こうした戦後混乱期における茶筅業への参入者も実態調査結果では，全て高山町内からで上述してきた基盤と母体産業の存在が，地縁的社会構造の下で茶筅業への参入を生み出してきたと言えよう．例えば，吉田信一の技術習得先は，久保喜一郎の息子久保修で，その孫で芳竹園を営む久保晴彦とは兄弟弟子をなす．一般的に技術の伝授は，２―３年で長い者で５―６年であり，血縁者に比べると伝授され，生産される茶筅の種類も多い者で15種類，少ない者では１―２種類と量産量販品に限られた．後述するように産地構造を変革させた田中喜造のように，自立に向けて20種類近くを習得した者は例外的である．この技術習得構造の差異に茶筅産地の階層的・集団的分化の機構が内在されていると同時に茶筅産地の戦後の需要拡大期における産地構造の変革の萌芽が内包されていた．

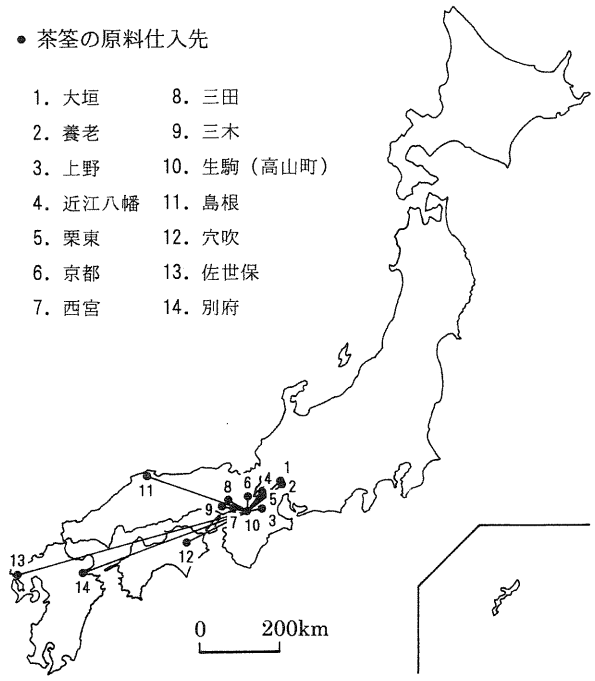
3　茶筅生産構造の変化と茶筅流通構造の変革

茶筅の原料をなす竹材は，上述したように地場の淡竹が用いられてきており，地場の竹林が茶筅発生の基盤をなしていた事は疑いはない．しかし，明治期には既に原料の竹材は，地域外から移入されており，日露戦争時の1905年の北倭村村是の林産物の部には北倭村内での生産量は898駄で，消費量は2751駄で，差し引き1852駄と生産量の２倍以上が地域外から移入されていた．その多くは，同じ畿内の有馬の竹細工産地のある摂津，前述した山城に隣接する高島扇骨で有名な近江，山城・大倭に接する伊賀である．

竹材は，この他にも実態調査からも明らかなように竹細工産地の別府や竹細工産地の背後に位置する西日本の竹材産地から供給されており，東は岐阜の西濃地方の大垣・養老から西は長崎の佐世保に及んでいる．大垣・養老の近くには神戸の竹工芸があり，県内の中心産地としては岐阜がある．佐世保に近接しては，佐賀武雄の西川登の竹細工があり，地方中心産地は八女である．阿波の背後の穴吹や伯耆の背後の出雲等の竹屋も淡竹を高山の竹屋や茶筅業者に納入している．竹林面積の過多と竹細工産地の展開は必ずしも前述したように相関せず，竹林の存在は地場の需要を基に，技術の導入・拡散と関連して産地を生み出してきた．

竹工芸の内にあって茶筅は発生の経緯と工芸の伝統の故に素材と加工に独特の要求をし続けてきた．それが，近隣以外では出雲，阿波，肥前を主な竹材の供給源としていった．この反面，江戸に近い上総，伊達の仙台，北陸金沢の加賀といった風土文化に茶筅を育てず，竹材の供給地化も産みださなかった（第４図）．

淡竹は，主に裏千家によって用いられてきたが，今日ではこれが主流となり，表千家の媒竹や武者小路千家の黒竹

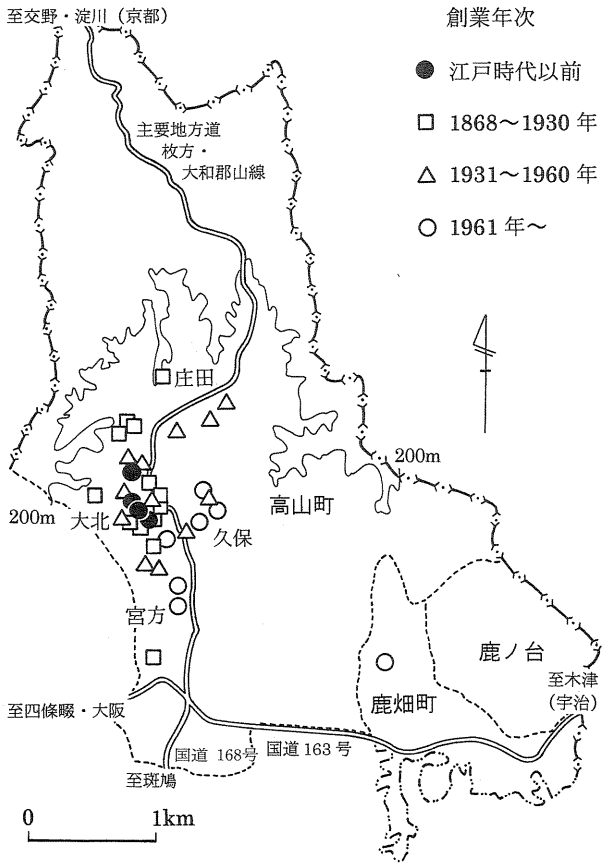


第４図　竹材の供給形態（実態調査より作成）

伝承で技術の秘伝を図った．それだけに，茶筅仲間組合も，座の伝統を引き継ぎ株仲間的結束を保ち，前述した茶筅の開祖・高山宗砌の碑を法楽寺に建立し，命日に法要を営み，仲間の結束を強める象徴（イコン）を構築した．それとともに，統領下で分家以外は参入を認可しない強固な血縁集団を確立し，下職加工を厳禁し，技術の閉鎖性を保ちつつ，情報の交換と価格の協定で組合は集団の存続を図った．

こうした技術伝播の統制を明文化したのが茶筅職営業仲間組合規約の第九条と十条である．九条では，「組合の中の者は総代人を経由するに非ざれば本業に諸願伺届等官署に差し出す事を得ざるものとす．」と定めていた．十条では，九条を補完し，社会的制約だけでなく，行政的圧力も活用し，「今後高山村に於いて本業を営む者は必ずこの規約に加盟致さすべし．若し背かんとするとき戸長役場または郡役所へ願出説諭を乞うべし．」として，組合の社会制度的統制を図っている．また，茶筅師の冠婚葬祭は，10軒の株内が仕切る等，擬制家族的強化も継続された（第２図）．

仲間組合の産地の集団保持の機能の強さは，北倭村是（明治38年発行）における明治32年（1899年）の統計で茶筅師が11人と変化をみせていない点にもあらわれている．この年の茶筅の生産は，71,500本で3,587円と多少一本当たりの価格は下がっているが，1895年当時と同じであり，仲間組合によって集団規模を保持せざるをえなかった経済的背景をうかがい知ることができる．この統計には，竹箸が91戸，ささら（筅）17戸，たけかご（簽）11戸，灰吹き45戸，米突き７戸，其の他の竹細工７戸，籠類57戸と竹細工の里の存在が明示され，茶筅産地がこれを基盤として存続してきている事をうかがわせている．



第２図　創業年次別茶筌業の分布（実態調査より作成）

この北倭には，後に竹伸針や茶杓の母体産業となるこれらの竹細工に加え，藁細工（376戸）や草履（862戸）などの地場の農産副産品加工や河内・泉州の綿業地域の背後山村における木綿業（698戸）が展開していた．これに加え，瓦（５）・土管（２），漆（３），酒（３）・醤油（２）などの農村工家（2,215戸）からなる農家副業を基礎とした典型的農村工業地域を北倭はなしていた．

この北倭の地域は，大正元年の農商務省農務局の農家副業に関する調査でも副業のため一般農家経済状態良好なる農村の一つとなっている．こうした敢えて茶筅生産に参入しなくともすむ農村工業社会の構造が，無足人座以来の茶筅師集団の伝統的社会意識を支え，高等女学校での茶道教育の進展等の需要増に支えられて社会経済的に茶筅産地の存続機構を保持させたとも言えよう．

茶筅の工芸品としての銘柄性の確立と仲間組合意識の高揚は，1911年の日英博覧会や翌年のブタペスト国立美術工芸博物館での展覧会などでの展示や奈良行幸時の皇族の御前展覧製作等で計られた．この時期の茶筅製作の様相は，久保左文の『高山茶筌』（1978）に詳しく記述してあるが，その祖父為造は，21代左京を名乗り，維新期には帯刀していたとされている．小割りと仕上げを行なった祖父にたいし，父為次郎（22代左京）は片木と味削りを行い，子供といえども仕事場には入れなかったと記されている．この反面家内分業をおこなっていただけに，正月初釜用の大口注文の入った10月以降の繁忙期には嫁いだ姉や近所の主婦に下編み・上編みや面取りを下請け内職として依頼し，自らは男仕事とされた片木や小割りもおこなっている．明治期にはこのように茶筅業は家業性を強めていたと言えよう．

田畑は小作にだし，茶筅専業であった久保左京家でも畑は，母がつっくていたと記述されているように，農家副業との紐帯は保持し，農村社会との連続性は堅持していた．こうした繁忙期を仲間仕入れで切り抜けた茶筅師もいたことは，仲間組合の醸成した産業地域社会の確立をうかがわせる．

茶筅の家業性は，久保左文が父左京の死で，兄正義（14歳）とともに姉よしえの監督の下10歳から上編み・面取りと学業の傍ら職人として訓練され，高等科を卒業すると祖父より片木から直接伝授されてきていることでもわかる．この時期には，西大門垣外の若衆会のみどり会（９人）に属した茶筅師の子弟５人が年長で家業を継いで自立してい

は少なく，初釜用の真竹とこの淡竹が竹材の基本をなしている．媒竹は，草葺家屋の天井等において百年近く自然に燻蒸されたものが良く，全国から仕入れれているが，次第に枯渇している．山城や紀伊の黒竹も釣竿用ではなく硬質のものを必要としており，需要も庸軒流や宗偏流と拡充はしたが加工技術を持つものは多くない．

初釜用の真竹は，青々とした2年生の苦竹で硬質のものが良く，寸法切りをして食塩で磨き，水洗いするだけである．この事もあって，繁忙期には下職も活用して素材加工がおこなわれた．淡竹は，これに対し排水の良い山薮の2—3年生の固く，粘りがあり，細割りに適した物を，11月から2月までの寒の内に切り出し，湯で煮沸し，垢と油を抜き，白布で拭き取り，刈り取った水田に円錐上に組み上げ太陽の下で一ヵ月晒す．その後夜露を避けて筵をたたみ，雨が降ったら必ず取り入れ，それを更に1—3年貯蔵した物を切って用いていた．

この素材加工工程が最も重労働であり，在庫の費用もかかつたため，一方で茶筅師の増大を抑制してきたことも否めない．それ故，次第にこの工程は高山の竹屋に委託する者が増え，1997年現在では，解答のあった28企業注25企業，89%が竹材業者に依存し，自己調達は6軒に留まる．しかも，竹材業者と全く取り引きしていないものは3軒にすぎず，19軒は全量竹材業者に依存している．今日では其の他からの調達が無い者が24企業と多い．しかしかっては，前述した左文が記述しているように，地縁．血縁の産業地域社会において，太物（80本，100本立）と細物（常穂，数穂）と得意技術に応じて分化した生産構造が生み出す，余りの素材が仕事と引き換えの仲間卸し的な原材料供給構造を構築していた．

上述した原材料の購入を生産規模別に分析すると，規模と業態が関係し，一般的には月産1000本未満の小零細業者は，全て高山町の地場の竹屋から購入し，単価よりは，月賦や延期等の支払いの便宜に依拠している．月産1000本を境に購入先の差異がみられるが，これは古くからの伝統的な京都との製品取り引きの一つの帰結で，自家調達や但馬や近江など多方面からの調達が残存している．しかし，月産2000本を越え，企業性が強まると素材調達先も2ないし4軒ではあるが地域外の竹屋との取り引きによる原材料費の軽減が経営的に図られている．それでも姻戚関係にある久保左京や良斎等の間では三田や養老などとの伝統的購入関係が残存している場合もある．伝統的購入関係は，久保左文や久保修等の上述した歴史的経緯を踏まえた高山の竹屋との地縁的結合も見られる．

高山の竹屋は，戦前は編針工場を経営し，台湾の原料を加工する工場を台湾にもつものもあった．しかし，今日茶筅用の竹材を供給しているのは，1946年に復員とともに編針用竹材を供給し，編針が家庭用編物機械の普及で需要が減退したのを契機に茶筅用竹材に61年に転換した尾山正一である．もうひとりは，この時期の高度成長期の需要増と上述した労働力配分からした分業化の時期に竹屋に参入した上西哲雄氏であり，伝統的且つ固定的なものではない．これは従来は，茶筅師が持ち山から自分で切り出したり，農家副業として切り出しや磨きをおこなったりしていたためである．

こうした新興の零細業者が小零細な茶筅師の上述した要求に対応しえたのは，農家兼業としての基盤がある．これに加え，尾山は1966年から茶道具に，上西は1971年から茶筅に参入し，茶筅師が町外から仕入れたものも磨く下職的竹屋機能を保持しえたためである．後述するように，韓国において国際工程分業・国際製品分業で生産しているものは，中田喜造商店の事例に認められるように，韓国産原料が基本で，中国産原料も活用してきている．しかし，両国とも国産原材料を供給して加工輸入するまでには至っていない．

茶筅の生産工程は，上述した片木からはじまり，まず11.5cm位の茶筅の寸法に竹を切り，一本の竹から5—6個の「ころ」をとる．そして，表皮を取る皮むきをし，16—24に等分して大割りする．その上で，竹べらをもちいて外側に曲げて皮から身を削ぎ，芯取りでなかの柔らかい身をとる．この片木と小刀で流派や用途によって決められた穂数に小割りするまでは，上述したように茶筅造りの前工程をなす．40度c位の湯に浸け，小割りした穂の内側を削りとった後，小刀で内側にしごく味削りの工程が茶筅師の技術を最も要求される本工程である．そして，上穂の一本一本の左右の両隅を削り取る面取りをおこなう．その後に上穂と下穂をわけながら下編みと上編みを行なう後工程がある．最後に内側の穂を内側によせて芯を整える芯よせ，穂の間隔と出入りの無いように整える腰並べ，穂先を流派の流儀に従って整える穂揃えからなる仕上げ工程と検品からなる．

上述した工程は，本来茶筅師が伝統的には自ら全ておこなってきたものであるが，前述したように既に戦前から家庭内分業は一般化し，需要の増大とともに次第に本分家間，業者間，そして本職と下職間と社会的分業が深化してきた．前工程は，一般に男子に，後工程は女子にと男女間の分業も見られたが，繁忙期には女子も前工程を担当しており，創業期のような時期にも同様な状況はみられる．

茶筅業は，今日でも企業形態を備えているものは非組合員となった中田喜造商店以外はまだ無いと言っても過言ではない．株式会社となった久保左京も自ら生産に従事することで伝統的銘柄性を保持する事を経営の基幹とした個人経営であると同時に生業的経営形態が強く，家業性を強く

保持している．両者の間にあって近代経営に脱皮し，輸入販売や複合経営を試みようとしている久保喜一郎以来の株式会社芳竹園もその家業性を脱却するまでには至っていない．

茶筅の事業所の67.7%は，従業員3人以下の生業層で，一社を除いて，従業員9人以下の零細企業である．しかも事業所の代表者の年齢は，60代以上が54%と，1975年当時の30.7%に比べ高齢化が進展しており，40代以下の壮年層も38.5%から31.4%に減少している．ただ未定者は多い（47.8%）が，後継者がいないとする者は，21.7%に留まり，伝統的家業継続性はかならずしも衰えてはいない．

これら3軒の株式会社を含む生駒茶筅業の従業者の大半は家族労働力で，1981年当時はまだ男子労働力が女子を上回っていた．それが，1993年の調査時には男女の割合は逆転し，家族労働力も，雇用労働力も全体としては減少し，下職や内職への依存度が高まった．この10年間に20代の若年男子労働力が男女とも減少し，地方地場産地一般にみられる高齢者労働への依存がこの高山の茶筅工芸産地でも進展してきてきた．これは，耐久的工芸としての茶道具と消耗的工芸としての茶筅を組み合わせ，伝統工芸品展や日展等の内外の展覧会を用いた作家に主導された美術工芸品産地化による若年労働力吸収への限界を呈示している．中堅労働力として産地存続を支えてきた30代も減少し，この10年間は後述する中田喜造商店でも高齢化が不可避の職人の熟練労働力に依存した国産高級・特殊品と韓国で育成した職人に依存してゆく一般輸入品との差別化経営政策へと転換せざるをえなくなる転機をなした．これは，年齢別労働力構成で60代と70代以上が男女とも増大している様相によく反映されている．

こうした家内労働力を補完しているのが，上述した農家副業が一般化していた農村工家地域（宮川　1977）における下職と内職労働力の蓄積である．1975年当時の調査では，319人の下職・内職労働力の存在が掌握されているが，81年の調査では312軒，1993年は257人と漸減してきた．現在では，月収30万円程度では職人の補給もままならず労働力の不足を感じている事業者も56.5%と半数を越えるに至っている．年齢的にも高齢者の割合が増大し，10代，20代はなく，30代が11.8%で，職人の基盤や母体をなす男子若年層は僅か3人に留まっている．これは，70代以上でも同じで，女子も15人と30代の24人程ではないが熟練度合も高い内職労働力の重要な担い手である．女子労働力の最多年齢帯は，50代の63人・32%であるが，これに次ぐのが60代の51人・25.8%である．こうした状況は，下職の職人層

第1－1表　茶筌師の規模別工程別下職軒数

月産本数	茶筌師の数	下職のない茶筌師の数	下職軒数						
			片木	小割り	味削り	面取り	編み	仕上げ	計
1500本以上	9	0	31	35	29	25	65	23	208
600～1500本	9	0	7	9	7	4	26	0	53
600本未満	11	4	4	7	1	0	10	0	22
NON DATE	6	1	7	3	4	2	13	0	29
計	35	5	49	54	41	31	114	23	312

（1981年実態調査より）

第1－2表　外注の工程別人員

（単位：人）

工程	1993年調査			1995年調査			
	1工程の仕事	2工程の仕事	3工程の仕事	1工程の仕事	2工程の仕事		3工程の仕事
竹の切断	3			6	3		
片木	43	2		49			
小割	45			50			
味削り	25			28			
面伏せ	8	12	75	25	1		70
下編み	12	8		19		23	
上編み	7			19			
腰ならべ	4	17		11	8		
穂そろえ	6			7			
計 割合(%)	153 (57.3)	39 (14.6)	75 (28.1)	214 (67.1)	35 (11.0)		70 (21.9)
合計	267			319			

※今回調査の267人は事業所内従事者10人を含む．

でも同じで，50代が12人で最も多く，60代が７人でこれに次ぐ．例えば，久保左文の職人の最高齢は86歳で，70代も多く，専属の職人20人の平均年齢は50歳をこえており，まだ壮年層の補給がある約50人の内職層とは様相を異にしている．

高齢化する下職・内職労働力を補完し始めているのが，作業内容は農家の主婦内職と同じ生駒町内に造成された真弓や鹿の台や奈良市の学園前等の団地に入居した壮年主婦層である．こうした主婦内職は，1975年当時の労働力にまだゆとりのあった時代と異なり，一工程から面伏せ，下編み，上編みの３つの後工程を手掛けるものが多くなった．主婦に依存した後工程だけでなく，本来下職に依拠していた前工程の依存度，特に片木・小割りの主婦内職依存度は工程中最も高い．腰並べ・穂揃えの仕上げ工程への主婦の活用も目立つ．後述する仲間卸的側面も加え，本工程の味削りも25軒と外注依存が見られる．このことは，味削り等も手掛けうる24軒の下職専業男子の存在が生産構造の多様化と存続機構の構築とって不可欠な存在として見逃すことはできないものとなってきたことを示唆する（第１表）．

仲間卸や職人依存は，1975年当時から存在し，高度成長期以降の需要増大につれ，また後述する茶筅師の製造卸化や製造小売化の進展につれて，一般化してきている．1981年の調査では下職を持たない茶筅師は，極僅かで，月産600本未満の茶筅師である．この反面，月産1,500本以上の生産をあげ企業化して行ったものは，９軒（25.7%）で208軒と全体の73.5%と下職の大半をその支配下に置いていた．こうした下職・内職の66.7%はまだ高山町内であり，これに隣接する田辺町（10.3%）や精華町（12.5%）を加えると大半が地場の底辺労働力に依存し続けていると言える．

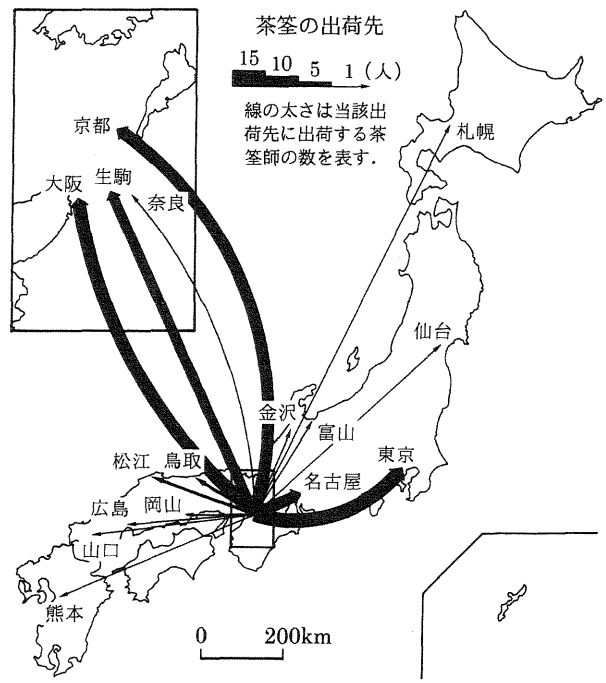
上述した生産構造に支えられた茶筅は，古くは農家副業の茶筅飛脚によって前述したように京都の茶道具屋や宇治の茶問屋に運ばれた．郵便制度が整えられてからは郵便で，宅急便の一般化以降はそれを活用して，京都・東京をはじめ全国の茶問屋や茶道具屋に配送している．

高山茶筅産地は，茶筅師を基幹としてその伝統的銘柄性を支えにしてきた．そのため，他の地場産地にみられるような消費地問屋や集散地問屋に対する産地問屋の発達は殆ど見られない．又茶筅の発展過程からする流派と関連し，その形状が伝統的に固定された独特の商品性格の故に消費地問屋や集散地問屋の発達も悪い．茶や茶道具に比べ消耗的で価格帯が安いだけでなく，その幅も狭く，したがって産地における仲買人の発展も殆ど見られていない．前述したように茶筅仲間組合の統制の緩んだ戦時体制以降，仲間卸も公然となり，外注や購入も高度成長期以降一般化した．上述した中田喜造商店や芳竹園の株式会社化につれて産地問屋的性格も生じてきているが，両社とも生産は継続しており，製造問屋的性格を保持している．

高山茶筅の出荷先は，伝統的出荷先の京都と東京がほぼ肩を並べ，これに大阪と松尾流等のうまれた茶道の中心で，全国的抹茶の中心産地西尾に近い名古屋が次ぐ．したがって，生駒の高山は，茶道の京都・大阪・名古屋といった３つの中心地に囲まれて伝統的にも現実的にもこの広域市場を巧みに活かして，後述するように需要中心の江戸・東京をおさえ，茶道のもう一つの地方中心の出雲・伯耆の山陰をおさえていった．

消耗品でありながら工芸品で茶筅と茶道の需給両面での固定的且つ継続的関係の持つ伝統的取り引き関係の強さは，月産1000本以上でも第二次大戦以降に参入した者は，今もって高山の創業当時の茶筅師に依存している者もいることで示されている．この反面，池田壱岐，谷村筑後，谷村頼基といった明治以来の創業の者は500本以下の月産でも京都・大阪・名古屋・東京の取り引き先や岡山・熊本等分けあてられた取り引き先を現在でも保持している．

一般的には第二次大戦以降茶筅に参入し，生産品種も少ない月産500本以下の零細生業層は，いまもって高山の茶筅業者にその出荷を依存している．零細業者は，茶筅師にとっては量産・量販品の品揃えと需給変動の調整機能を担う者と位置づけられてはいるが，高度の技能者の減少につれて茶筅販売戦略上不可欠の存在ともなりつつある．この時期には，第二次大戦後，久保修より技術を習得し茶筅に参入した吉田信一がその生産本数はまだ少ないものの，そのもとから脱却し，高山に加え奈良，京都，大阪，山口と



第５図　茶筅の出荷先形態（実態調査より作成）

販路を拡充していった．これは1966年の高度成長期で，特に1970，71年を転機としている．月産2000本以上の茶筅師は，東京の山本山や名古屋の升半等の大手の茶問屋や名古屋の駒屋など茶道具専門問屋と大手流通資本と取引を持つものが少なくない．1967年に株式会社化した久保左京商店もその一例である（第５図）．

取り引き先は，分家の場合には譲られる事も多く，職人の独立とは創業形態を一般的には異にしている．東京の取り引き先を茶筅需要が増大し，操業が容易であった1970年の分家に際して左京より譲り受けた三男良斎久保透商店はこの一例である．一方本家筋も自ら時代毎に特色ある取り引き先を開拓している．例えば谷村丹後の和北堂は，明治期に京都寺町の茶道具屋，昭和期には東京の茶道具屋，第二次大戦以降は大阪の阪急・大丸の百貨店，そして高度経済成長期に入ると茶道人口の増大に着目して流派の師匠に納めている．最近では，工芸品の買い回り観光化の進展に合わせて公開実演から製造小売を行なうため街道筋に新規に店を1971年の久保左京のように新築しているものもある．

取り引き先の形態は，1975年当時はまだ問屋（63.8%）が小売り店（27.9%９）を上回り，消費者（3.2%），仲間（2.7%），百貨店（2.4%）となっていた．それが，1993年には問屋（37.1%）と小売り店（56.0%）の地位が逆転し，消費者（2.5%），仲間（2.4%），百貨店（1.1%）も減少している．

業態別取引先の変化にともない取り引き手段も100%現金回収（69.6%）と1975年当時（67.8%）に比べ若干多くなり，手形の平均サイトも81日となっている．これは，販売地域が1975年当時の近畿（52.6%）・東海（13.9%）を中心に関東（16.8%）中国（7.0%）・九州（3.0%），北陸（2.2%）に四国（1.0%）を加えたものから1993年には関東（33.6%）を中心に近畿（22.2%）と東海（13.2%）を加え，中国（8.7%），九州（4.9%），北陸（6.5%）だけでなく，四国（3.2%）や東北（1.7%）へと取り引き市場が全国化してきたことの反映でもある．

上述してきた生産流通構造を根底から変革したのが前述した中田喜造商店である．伝統的中堅茶筅師であった谷村守の前工程を担う職人として1961年に茶筅業に参入し，65年に独立した．中田は，これまでの茶筅師と異なり，茶筅職人を組織し，完成品をつくり，検品能力を高めることで，新たな生産流通機能の構築を分離独立の段階から志向した．月産2000本の中堅茶筅師であったが，京都，大阪，名古屋，東京に加え広島を取り引き先として擁した谷村の市場は，茶筅需要の増大と合わせて，分家方式ではないが中田の独立を許容し，可能とする構造的契機を与えた．

視点をかえて見ると茶筅需要の増大と増大に呼応できない伝統的生産構造の軋轢が戦時体制下から生じていた分家・職人の新規参入機構を増幅し，新たな量産・量販生産流通体制を構築する余地を生み出してきたとも言えよう．この契機を独立の好機とし得た中田の存在は，構造的にだけでなく主体的に従業員の雇用による作業場様式での量産量販体制の形成をもたらした．そして高山茶筅産地の生産流通構造の伝統から近代への次元の転換の転機を生み出していった．機械工場勤務の従業員を活用した前工程を主とした油圧機械の開発や主工程の機械の創作等の努力は，こうした近代化の表徴である．

中田商店は，製造卸から味削りもできる職人や下職・内職を活用し，産地の伝統的生産流通構造をも踏まえた二重構造を活かした資本蓄積を促進した．そして，職人の従業員化による労災等の保健や雇用体制の安定化のためにも1976年には株式会社とし，翌年からは経理・在庫の計算機管理を採用している．その結果，味削りのできる職人10人程度に加え，20人程度の男子下職と30分範囲内で40名程度の内職を雇用する体制を構築している．

販売面でも中田は1969年の毎日グラフや1977年の読売新聞を活用した大和路の茶筅の里の印象による銘柄性の新たな確立を基に通信販売制度を巧みに活用した．また宇治の田原製茶場などの茶問屋や東京の茶道具屋の資本や販売網も利用しつつ，茶箪笥や茶道具との一体販売など新たな販売手法も開発している．1974年からは，碧海信用金庫や瀬戸・土岐など瀬戸・東濃陶磁器産地を組込み，信用金庫や農協の５万円程度の接待用茶棚を考案し，一般用に２万円程度の茶道具箱や更に廉価な１万円いないの茶盆点前を開発し需要開拓をおこなっている．

更に，自らの茶筅の銘柄性の確立の為には，茶問屋や茶道具屋とともに茶会を催し，1977年以降本格化した指頭芸術の粋の茶筅の印象を強めつつ流派需要の開拓や大徳寺等の茶道具への箱書きによる銘柄性確立の伝統的手法をも活用している．茶会も，1995年の鎌倉の忘水庵との東京台東区根岸の西蔵院での鴬渓茶会や東京善行寺での赤穂義士にちなんだ忠臣蔵茶会，葉山茶会等需要の多い首都圏や海外の豪州での日本文化紹介のように催事の一貫として，阿波徳島の竹炭などの話題商品も含め新規の需要を総合的に開拓するのに活用している．

上述した需要の掌握を踏まえ，需要の増大した1972年頃から開始された高山茶筅を模倣した韓国産強穂の輸入に対抗し，1974年に制定された伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づき75年５月に伝統的工芸品指定がなされた．この法でうみだされた伝統工芸士の製造に対応し，76年に株式会社化し，1977年から中田商店は韓国ソウルの漁網業者と開発輸入の体制を構築した．生産は，韓国内での後進地のソウル東の山岳地の江原道や最も貧しい農村地域であった全羅南道で，１年半程度の借地で一カ所５－６人で集

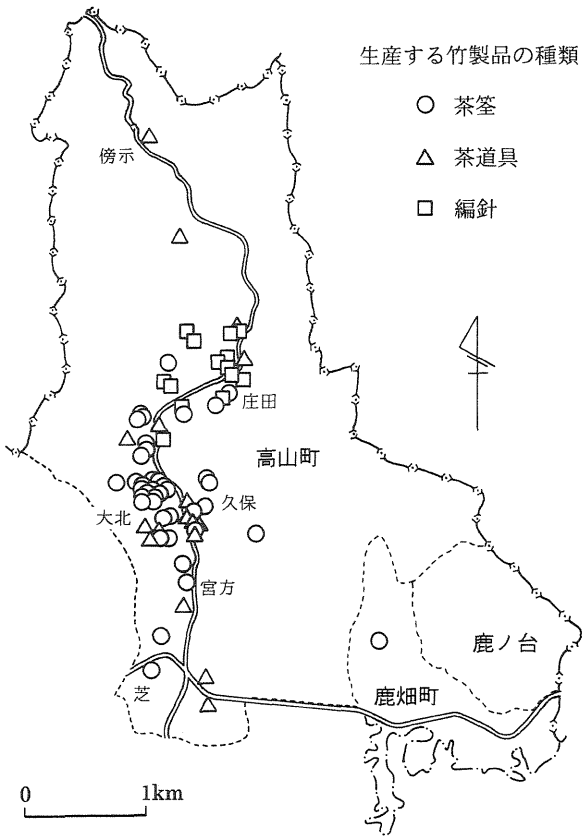
団を組んだ所謂渡り職人によって担われている．現在6集団で総数130名位の茶筅職人がおり，こうした集団の内，技術的にも技能的にも高度で信頼関係の確立した2集団に技術指導と現地の親方の検品能力の向上を計ってきた．その結果，一回一万本の単位で船積することで採算の合う段階に至った．

こうした韓国との間での茶筅業の国際生産工程分業は，1991年以降の中ソとの国交回復と対外投資の本格化，国際分業一般の進展にともない地場の全羅道産（40%）に加え中国からの真竹に近い紅竹等輸入竹の活用だけでなく，生産品の品質の歩留まりの向上によって92年以降は，中田商店としても春秋の単位価格の値上げ交渉に対応している．この一方において相互の検品能力の向上による韓国での委託加工品の技術・技能向上による茶筅としての機能・風格の向上とコンテーナ内での輸送方式の改善による品質の保持を計った．他方で奥田正雄のような名人的味削り職人の死亡にともなう産地構造変動を契機に日本国内では地場の茶筅師からの購入体制も構築し，伝統・近代・国際の三重の生産流通構造を確立している．

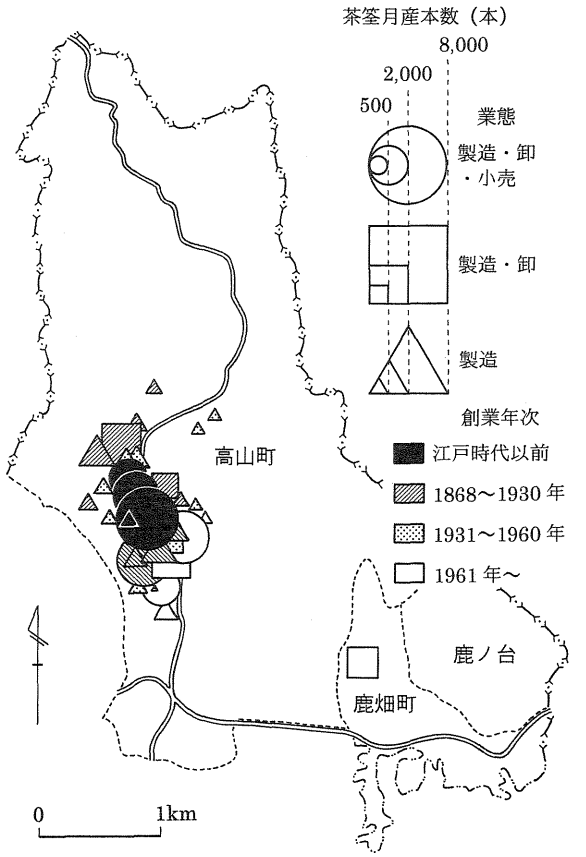
韓国茶筅の委託加工による輸入販売は，前述した株式会社の芳竹園も1970年代初期の茶筅需要の急増期で伝統的工芸品に関しても絞りのように戦前からの委託加工の伝統を踏まえて国際工程分業が一般化していた韓国から開始している(宮川　1989)．こうした韓国産茶筅は，消費地の茶道具屋や茶問屋でも扱う者が生じた．そのため，高山茶筅産地は前述した伝統的工芸品の指定を1975年に受け，奈良県茶筌生産協同組合があらかじめ通産大臣が認めた方法で検査合格した伝統的工芸品であるとする証書を添付した．しかし，消費地だけでなく，高山の産地でも韓国茶筅を扱うものはあとをたたなかった．例えば，名古屋の茶道具問屋の大崎商店は，卸値で200円程の差異のある韓国産茶筅を1978年以降本格的に扱い，1980年には高山産6万本にたいし，韓国産3．6万本と半数を越えるまでになった．

韓国産輸入の増大に対処し，1987年に伝統工芸士となった当代の久保左文は奈良国体での天皇の御前製作等で銘柄性の保持に努めている．奈良県茶筌生産組合は通商産業大臣指定，伝統的工芸品と記載した高山茶筌の独自の商標を発行した．そして1994年には中小企業のデザイン高度化事業を活用し，大丸のデザイナー2人に委託して，茶筅パッケージを開発して，伝統工芸士以外の茶筅にたいしても製品の差別化を図り，茶道具販売とあわせて産地の存続を組合として助成している．

前述したように高山茶筅産地は，高山の農家副業地域にあって，古くからの竹細工産地を基盤として成立していた．茶筅以外にも箸・茶杓・灰吹等半消耗的且つ安価な茶道具から名工と呼ばれた久保竹外や正木雨工等を生み出して次



第6－1図　茶筅・茶道具生産業者分布
（実態調査より作成）



第6－2図　創業年次別・規模別・業態別茶筌師の分布
（実態調査より作成）

第に本格的且つ工芸的茶道具をも産出する茶道具産地を内包するに至っている．しかし，高山は都の工芸的茶道具産地の京都に近く，千利休以来本来趣向品的工芸性が強く，一品性で耐久性もあり，多品種少量生産であるだけに，生業的であった．したがって，前述したように京都でその地位を確立した久保の吉岡のような人物も誕生したが，茶道具産地全体としては鄙の補完産地に留まってきた．

実態調査を行なった茶道具業者13軒は，明治から金解禁が進む一方で農業恐慌を含む昭和恐慌のおきた1930年までに創業していたものが5業者残存しており，伝統的継続性を保持している．そして，上述した戦時体制下から戦後の混乱・復興期に創業したものが4軒，その後の高度成長による1961年以降の茶道人口の増大期に創業したものが4軒となっている．伝統的茶筅師の一画を占める谷村丹後は明治期には親戚の影林清一に茶道具生産を依頼した．このように資本蓄積が相対的に進み，茶道具屋や茶問屋との関連で茶筅の納品に際して品揃えの必要のあった茶筅師の下にこうした茶道具業者は次第に組織され，花入れ，茶杓，茶杓筒，蓋置等を生産していった（第6－1図）．

明治期には久保左京も茶道具業者との取り引きを開始しており，戦時体制に入る前に5軒の茶筅師が茶道具を扱っていた．昭和期には創業とほぼ同時に茶道具も扱う者もあらわれ，茶道具産地が茶筅産地の基盤をなす底辺産地の一層を占めるまでに至ったと言えよう．戦後は，1955年に久保修が茶道具取り引きを本格化しているように伝統的茶筅師にとって，茶道具をも扱うのは当然の事となり，高度成長期からは，上述した企業的な中田商店だけでなく分家した良斎久保透商店のように独立とともに茶筅とともに茶道具を一体として取り扱うことが販路の確保と拡充にとって不可欠となった．これは，実態調査で判明した11軒中，前者の時期の取り引き開始が2軒に比べ，後者が4軒となっていることでもうかがえる．また，1966年に前述した竹屋の尾山正一が久保左文の依頼で花筒，蓋置の製作を手掛けている．このように，茶筅師が主導して，前述した竹細工産地の基盤と接遇環境のなかで流通部門に参画し，積極的に社会分業を促進して，茶道具をとりこみ自らの存続機構を構築してきた側面もある（第6－2図）．

伝統的工芸品指定の後は，後述するように高山での茶筅・茶道具の買い回り需要も見込めつつあったことや茶筅業としての販路の確保，固定化にとって茶道具販売が経営的にも経費的にも不可欠となり，高山茶筅業者もその需要に応えるため他産地の茶道具も移入するようになった．久保左京は1967年には株式会社化し，近代化への第一歩を踏み出した．そのほぼ十年の経験を基に新興の中田商店が株式会社化した1976年にこれは都に近い京都府向日市や鄙の大分県別府市等から移入し始めた．中田商店も上述したように域外だけでなく地場の箱書きにたえうる茶杓等の職人6人に蓋置等の職人18人を組織して地場の茶道具生産の支配機構を強めている．

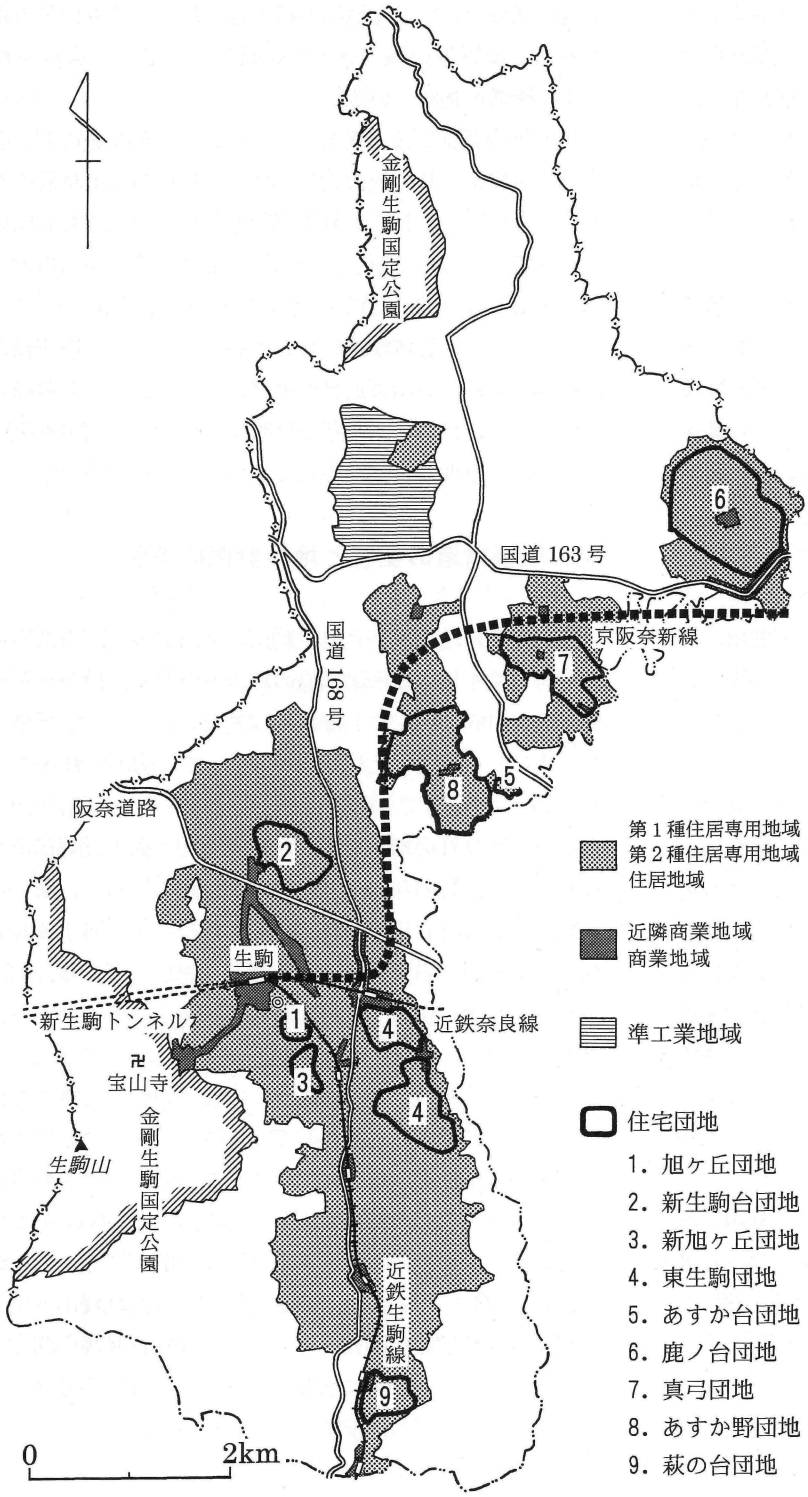
1993年の調査では，兼業している20人の茶筅師の内，農業，茶筅製造，其の他の勤務を除く，17軒が茶道具販売を兼業している．そして，兼業部門の売り上げ比率も30％以上が5割を占めるに至り，70％以上も2企業，50％以上－70％未満が4企業，30％以上50％未満が4企業となている．このように地域構造において高山茶筅産地の底辺構造に組み込まれた高山茶道具産地だけでなく，そこで蓄積した情報と経験にもとずく茶道具販売そのものが高山茶筅産地の存続に重要な役割を果たしていることは否めない．

4　地域構造の変容と地域計画の進展

高山茶筅産地は，奈良県生駒市の北部にあり，京都府・大阪府と境を接する所謂国境の峠の地をなす．1995年現在の人口は106,915人で1㎢の人口密度は2,010人で所帯当たり人口3.0人の大阪大都市圏にあって平均的中都市である．人口は，今日でも漸増し，転入(7,504人)が転出(6,057人）を上回り社会増が認められる典型的大都市近郊都市をなしてきた．1921年に旧北生駒村が生駒町となり，第二次大戦後の1955年に旧南生駒村を，57年に高山の属する北倭村を合併し，1971年にようやく市制を施行している．旧北倭村の最も奥に位置する高山町（12.28km）も人口はその後微増しており，1995年で1,307世帯で，4,424人である．

生駒は，弥生時代から拓かれ，大和の防衛にも重要な役割をはたしてきている．そして，修験の行場もなしてきた生駒山（642m）の中腹に噴出した安山岩の般若窟を背後において1678年に湛海律師によって開かれた歓喜天を本尊とした真言宗の宝山寺の門前町として発展してきた．生駒は，この真言宗の本山金剛峯寺の造営された高野山と東寺の置かれた京都の中間にある．また大阪と奈良の中間にも位置しており，1914年に大軌（現近鉄奈良線）が開通することで，大阪近郊の門前町としての地位を確立した．1918年には生駒駅と宝山寺との間に日本初のケーブルカーが開設され観光地となり，1929年には山頂遊園地も開業し，大都市大阪の日帰り観光地として確立した．

上述した土地柄を反映して，戦時体制下では，1943年の企画院による中央計画素案における近畿統制地区・京阪神大都市地区・工業や学校の関西規制地域の外側にあって，生駒に近接する3都の戦時疎開地として一時的に人口も増えた．第二次大戦後は，1955年には早くも生駒駅の南に旭か丘団地（771戸）が造成され，近郊住宅地化が始まっている．1958年には本堂を復興した信貴山縁起絵巻きで有名な信貴山真言宗の総本山朝護孫子寺のある信貴山を結ぶ竹林



第７図　生駒市の都市計画と住宅団地造成
（生駒市資料より作成）

の豊かであった生駒信貴スカイラインを開通させた．そして金剛・生駒国定公園の指定を獲て，近畿圏整備法でも保全区域をなしている（第７図）．

1959年には大阪・奈良間の有料自動車高速道の阪奈道路の開設をみ，1961年には生駒駅北でこの阪奈道路に沿って新生駒台団地（474戸）の造成を見，駅の南では，新旭か丘（284戸）が造成されている．1963年に「首都圏と並ぶ我が国の経済・文化の中心としてふさわしい近畿圏の建設とその秩序ある発展を図ること」を目的に近畿圏整備法が制定された．翌年には近畿圏の近郊整備区域及び都市開発区域の整備及び開発に関する法律が制定されてその整備の具体的手法と方向が定められた．

近畿日本鉄道がこの1964年に新生駒トンネルを開削し，運行改善を計る頃から近郊整備区域の一画を占める生駒での大阪の近郊都市形成も本格化して，人口も1960年の23,128人（現市域）から65年の28,511人に増大している．生駒は，上述した金剛・生駒国定公園をその都市の優れた接遇環境として有する．この接遇環境を保全するため，生駒は，67年制定の近畿圏の保全区域の整備に関する法律で保全区域に指定されている．この年には翌年の1968年の東生駒駅新設に対応して東生駒団地（1017戸）が造成に着手された．そして，近畿日本鉄道奈良線の大型６両編制への施設対応も完成し，さらなる住宅団地造成の布石が打たれている．

生駒に隣接する奈良市でも奈良大学に近接した近畿日本鉄道の学園前駅を一つの中心として住宅地化が進展した．その背後に位置する生駒市でも富雄駅から高山に向かう都市計画道路整備と合わせてまず1969年にあすか台団地（100戸）が造成された．1972年には現在の関西文化学術研究都市に隣接する鹿の台団地（2400戸）の造成が開始されている．1976年には都市計画街路富雄・高山線の東側で鹿の台とあすか台の間に真弓団地（1577戸）の造成が始まり，あすか団地の２期（1607戸）も造成された．関西学術研究都市調査懇談会が正式に新都市構想を発表した1978年には萩の台団地（948戸）の造成も開始されて，近郊住宅地化に拍車が駆けられた．

こうした近郊住宅地化が急激に進展する生駒にあって，旧北倭村の奥地の高山は，市街化調整区域で，1990年人口は4,404人，1,086世帯で人口密度も356.6人と市の2,010人と遙かに低く，1975年対比の人口増加率も15.5に留まる．こうした状況が，隣接する関西学術文化研究都市建設の遅れもあって，最近まで伝統的な農家副業をともなった兼業農業地域を温存し，竹林のある農村景観のなかで茶筅の里

の美観を保持させてきた．

高山のある旧北倭村は，農家人口が1995年現在で2,727人と生駒市全体の57.4％と半数以上を占める．無論，この北倭村でも農家人口は，1990年の3,090人(55.5％)から減少しているが，85年(3,619人55.2％)，80年(3,786人　54.4％)，そして関西学術文化研究都市計画の立案と住宅団地の造成が本格化した1975年(3,976人　53.5％)に比べて生駒市全体の農家戸数減少過程でその比率を相対的に高めている．この北倭村でも現在の農業就業人口は，683人で男子251人に対し女子が432人と女子中心の農業経営となっている．

この高山の地域は前述したように歴史的にも農家副業が発達していた地域で，農家人口で北倭村(1,273人，農業人口　331人　農家数　271戸)の半分以下の旧南生駒村と専業戸数では北倭村の25戸と南生駒村の24戸を僅か一戸上回るだけである．この北倭村のなかでも奥地の高山は，専業農家数は庄田（6軒)，久保（3軒）と9軒のみで，一種兼業も久保と奥地の傍示と南の宮方に各一軒ずつ展開するにすぎず，全体として2種兼業農家の卓越する地域を構成している．

なかでも茶筅業の中核をなしてきた大北は，こうした兼業農業地域の典型で，56戸全てが2種兼業をなし，その経営耕地面積は2,307aで一戸平均で41.1aと旧北倭村平均の44.2aを下回る．しかも，新興で副次的な茶筅業地域をなしてきた久保(1,742a　一戸平均40.5a)は，大北(176a，213a）と対照的に借入耕地面積（208a）が貸付耕地面積（72a）をうわまわって，上述した茶筅業地域の伝統的な農家兼業形態と兼業構造の一端を示している．これは，集落別の就業状態別世帯員数にも反映されており，大北(231人）は自営農業だけに従事した者（49人）が久保（182人，64人）に比べて少ない．無論久保も相対的は他の仕事を主とした者（52人，28.6％）や他の仕事だけに従事した者(21人，11.5％)では，大北(90人，28.6％；23人，10.0％）にひけをとらない．

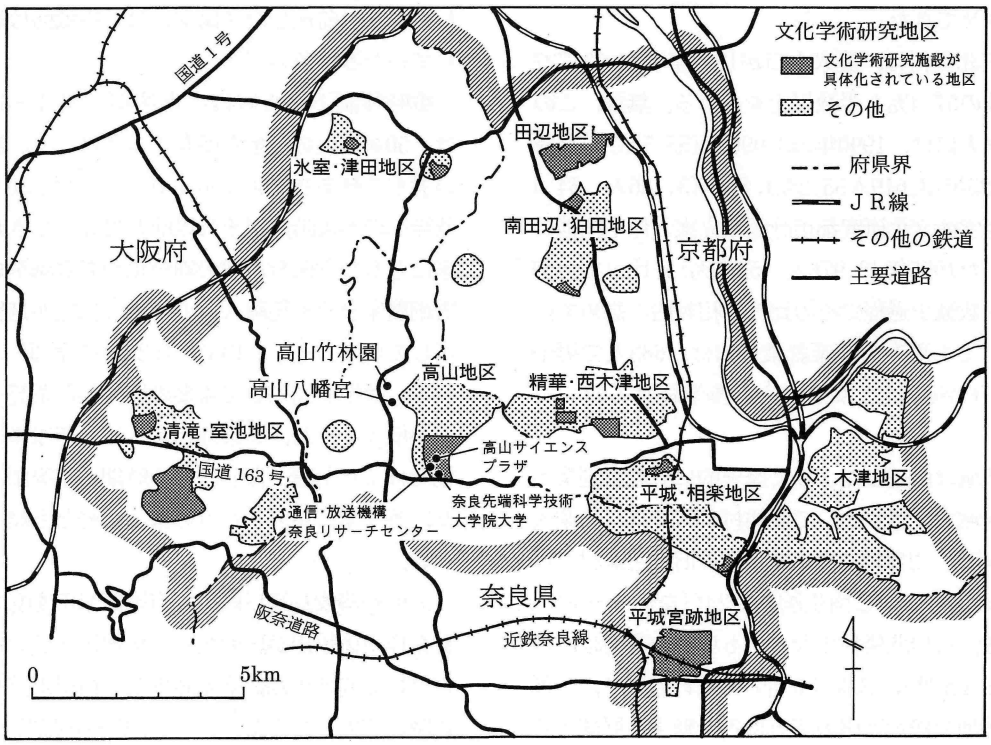
こうした農家兼業地域における茶筅師の創業時期別の農地保有状況を実態調査で解答のあった26軒についてみると，明治以前創業の2軒はともに農地を保有するが，上述したように不況期や分家の時期に処分しており，現在では30―50aと50―100aが各一戸となっている．そして，戦時体制に入るまでの茶筅産地の確立期創業の12軒中1軒は現在では農地を有していない．しかし，伝統的血縁集団に支えられ，参入障壁も高山茶筅職仲間組合規約に守られて高かったため，現在でも農地を保有している者が大半である．階層別では50―100a層は一軒のみで，30―50a層が7軒と最も多く，これに30a未満が3軒で続く．こうした茶筅師の大半は今日でも集落の平均所有耕地面積以上を保有しており，前述した久保家をはじめ戦前は農地を小作に出していた者が多い．

戦時体制下から戦後の復興期（1931―60年）にかけては，50a以上の農地を所有する者はなく，農地を保有しない者も3軒あり，30―50aが2軒に対し30a未満も2軒と茶筅への参入階層がそれ以前と異なってきた．これは，分家にともなう保有農地の細分化や農家副業に依存していた零細農家層の茶筅職人への参入と独立が進展してきた事を示している．そして1955年に20aを売却した久保正文のように，農地を売却して需要の増大した茶筅の専業化するものが増えてきた．この様相は，1961年以降の高度経済成長期ではより明瞭となり，この時期に茶筅師として独立したり，茶筅業に参入したものは，5軒とも農地を保有していない．

高度経済成長期以降は，自家飯米田を有した者でも，請負耕作や休耕田が一般化し，休耕田を竹の寒干しに用いるだけになってきた．茶筅師専業も稲田正実をはじめ1971年以降は増大してきた．しかし，1981年当時までは，312軒の下職のうち，男子専業の24軒を除くと農家の主婦（188人）が重要な茶筅生産の底辺労働をになっていた．この当時39人，12.5％であった勤め人の主婦は，1993年の調査対象の257名では近隣の住宅団地等の勤め人の主婦が半数を越え，農家の主婦を上回った．しかしながら10月から12月の初釜用の最繁忙期，1月から3月までの繁忙期の労働力需要の変動を吸収してきた水田単作地域の農家主婦労働力の存在意義はまだ生産の季節変動が残存しているだけに失しなわれてはいない．しかし，農業の周年化や茶筅生産の企業化にともなつて定量的納品度合が高く，下職・内職管理のしやすい勤め人の主婦への依存が着実に高まりつつある．

国道163号線バイパスを越えた生駒市の最北端の高山は，都市計画でも市街化調整地域とされ，北東端の金剛生駒国定公園を除くと地域計画指定はながらく行なわれていない．一方，近畿日本鉄道の生駒駅では，市役所側の駅南口再開発事業の完成した1972年に生駒駅北口再開発基本構想が示され，86年に協議会が発足し，1987年に北口第一地区(1.4ha）の都市計画決定がなされた．1990年に第一―第四地区（3.9ha）の都市計画変更がなされ，1993年に着工し，百貨店，店舗，住宅からなる再開発ビルが1996年に駅前に完工した．

生駒駅は，1989年の運輸計画審議会答申に基ずき近鉄奈良線の生駒駅と近鉄京都線の高の原駅を結ぶ関西学術文化都市の幹線鉄道として2005年を目標にした京阪奈新線の分岐点ともなり，その中心性をたかめつつある．しかし，これも1988年に設立され鹿の台等の住宅団地へはのびている近鉄ケイブルネトワークと同様に高山の茶筅の里を大きく変革する交通通信基盤とはならず，計画決定がおくれ



第８図　関西学術文化研究都市計画
（奈良県・財団法人関西学術文化研究都市推進機構資料より作成）

ている関西学術文化研究都市の高山地区と国道163号バイパスで結ばれる北田原地区へのアクセス整備に留まる．

関西学術文化研究都市では，1978年に関西学術研究都市調査懇談会が設立され，近畿圏基本整備計画での調査が内閣総理大臣によって決定された．そして1982年に国土庁が関西学術研究都市基本構想を発表した．パイロットプランとし，高山地区を含む関西文化学術研究都市における奈良県の基本構想は1984年に公表された．この年には，6省庁による京阪奈地域総合整備計画も発表され，分散した学園整備地区間に置かれた高山茶筅の里の基本的地域構造も定められた．

この地域計画は，1986年に財団法人関西文化学術研究都市推進機構が設立され，翌87年に関西文化学術研究都市建設促進法が公布され，88年に建設基本方針にもとずく３府県の建設計画が承認されて本格的に実践された．高山地区では，1991年10月に開学された奈良先端科学技術大学院大学が1993年から学生募集をして，高山地区第一工区(45ha)の中核施設となっている（第８図）．

奈良先端科学技術大学院大学は，情報科学研究科，物質創成科学研究科，バイオサイエンス科学研究科よりなり，電子図書館，先端科学技術研究調査センターなどが付置され，職員・学生の宿舎が付帯している．この大学院大学を活用して枯渇してきている茶筅用良質竹材の遺伝子組み替え技術をはじめとした先端科学での物質創成を企図しつつある近代的茶筅業も生まれてきている．この大学に隣接して，その北側には1991年設立の奈良先端科学技術大学院大学支援財団の地域産学交流施設としの高山サイエンスプラザが1993年に開設された．そこには1995年開設の通信放送機構のＢ－ＩＳＤＮ利用のマルチメデイソフト開発と電子水族館開発の奈良映像リサーチセンターや日本電気，参天製薬奈良ＲＤセンター眼科研究所，森精機，鐘ヶ淵化学工業，村本建設，ＴＨＫ等と新しい先端科学技術や産業の孵卵機構が形成されている．

高山第一工区の北では関西文化学術研究都市の精華・西木津中核地区や第一工区の背後地区として，その接遇環境向上も企図して，第二工区（285ha）の基本計画が住宅都市整備公団によって立案され，大規模な公園と住宅が研究関連施設とともに計画されている．この公園は，茶筅の里の接遇環境向上のため1989年に県道枚方大和郡山線沿に茶筅の里の高山八幡宮の北に造営され，資料館や茶室の竹生庵を擁した生駒市高山竹林園に隣接しており，茶筅の里の接遇環境の更新に大きく寄与しよう．

竹生庵は，1989年に前述した近代企業で斬新な経営戦略をとる中田喜造商店によって1991年に桂歌の助花舞台として活用されたことはある．だが，公的施設としての制約もあり，まだ茶筅文化の普及・向上の拠点とは完全になりえていない．また，観光バスの受け入れもこの中田喜造商店だけでなく，1980年に店舗兼作業場を住居と分離して建設した良斎久保透商店や1981年に店舗を開設した久保左京等でも一般化したが，新たな観光的買い回り需要を創造するまでにはなっていない．また，久保修，久保左文，谷村丹後といった中核をなす茶筅師の店も全て茶筅の里の美

観に適合し，田園景観を活用しつつ買いまわり散策路を整備するまでには至ってなく，規模的にもまだ限界をもつ．

今後は伝統工芸師の竹茗堂の久保昌城，竹筌堂の久保造，竹栄堂の久保省三，久保鉄造商店の久保美国，久保駒吉商店の久保伊佐夫，株式会社左京の久保正之，和北堂の谷村丹後，谷村筑後の谷村浩や竹穂園の吉田賀津三，翠宏園の平田俊之，翠竹園の稲田晴久，片岡竹峯堂の片岡金次郎，芳仙園の中谷斎，そして菱本勝弘等がその銘柄性を活用し，さらに若手の工芸師を育成し，技術・技能だけでなく茶筅文化を向上させて行くことが望ましい．その上で，茶道具製作者と一体となつた総合的な茶器文化の里造を翠華園の谷村佳彦等若手の経営者が主導してゆく．このことが関西文化学術研究都市の高山とまだ計画が未定の北田原地区の間に位置する高山茶筅の里としては肝要である．こうした主体的な茶器文化の中核地域形成が，上述した接遇環境と京都・奈良・大阪の古都に囲まれた地域間構造と鉄道・道路・通信体系整備とあいまって，新たな竹工芸職人，作家をこの茶筅の里に吸引してゆこう．それが花器をはじめ，関連工芸を導入して，世界的工芸の里を育成し，茶筅の里の新たな地域計画的基盤・接遇環境となる．こうした地域産業計画を実践することが茶筅の里としても関西文化学術研究都市としてもその地域開発効果を地域構造的に向上させてゆくのに望ましい．

5　む　す　び

広くアジアに展開した竹細工は，たんに竹林の分布と生活の需要が関連して，普遍的に誕生しただけではなく，歴史的に蓄積されてきた社会文化構造と防災・殖産の両面から推進された地域計画と深く関連した地域構造を抜きにしては論じられない．また竹細工では，この歴史的な国家形成と社会文化構造の構築の過程で，その竹材が本来的に有してきた神秘性を活かした工芸化が推進されてきている．

そして，茶道と茶器は別論（宮川　1997）で述べたように戦国時代を終焉させる織田や豊臣の贈答や茶会を通じたその統治と戦国終焉の手段として用いられた．この結果，この茶道文化の確立に深くかかわった安土，京都，奈良，大阪，堺に囲まれ，その国境にあって，古くから紀州，河内，奈良，京都に至る竹林に恵まれ，生駒・金剛の山筋にあった鷹山に茶筅産地が形成された．

村田珠光と高山宗砌の逸話は，高山家の無足人に茶筅生産の銘柄性を付与して行く原点をなすとともに，禁裏・将軍と結合して茶筅をたんなる茶道の消耗品から茶道文化と結合した工芸品へと転換させていった．これは，奈良奉行や京都所司代と結び，鳥羽伏見街道や淀の渡しを御用提灯をかざした農家副業の茶筅飛脚が走ることで，茶道文化と茶器製造の関連において格段に差別化された銘柄性を確立している．この銘柄性と伝統性を活して新たな宮津への仕官に際して高山に残り無足人となつた旧家臣団への士族授産と地場産業育成の地域計画は，茶筅業の保持・育成・増幅を苗字帯刀を許された重層的地域社会構造と自家飯米の確保と分家を許容する農地保有を基盤に実践されている．

高山八幡宮を用い，東大寺や興福院を活用した無足人座の強化は茶筅師の血縁集団の強化と技術伝播の閉鎖性の確立を支えた．そして，明治期の茶筅職仲間組合規約による伝統的技術の家業化と血縁集団の増幅による茶筅産地の形成は農家副業地域における一般竹細工産地を基盤として促された．こうした過程が茶筅業を一般竹細工業の上位に位置づけさせた．

茶筅職仲間組合は，単なる茶筅工芸産地での茶筅師仲間の媒体的中間組織として，親睦促進，技術向上，仲間卸による産地全体の需給調整機能を果たした．それだけでなく，血縁的茶筅集団の統制・保持機関として，戸長役場や郡役所等の行政末端組織をも活用した地域の社会・文化構造に深く根ざした地域社会組織をこの組合はなしてきた．さらにこの組織は，明治以降上述した女子高校教育にも関与した茶道文化社会と結合してその基礎市場の拡充を図った．

この一方これは全国的銘柄の保持・向上を促進し，全国唯一の中枢産地を確立し，全国市場における独占的需給構造の構築を可能にし，その需給の調整と価格の保持の機能を自動的に果たした．この機能が1912年の農商務省の農家副業に関する調査において副業の為一般農家経済状態の良好なる農村の一つとされた高山の農村工業地域を基盤として，茶筅工芸産地を強化し，基盤をなした一般竹細工業や茶器製造業を職人・下職の母体としてくみこんだ．そして，さらに農閑期労働力を茶筅の繁忙期の補完労働力として，また内職層としてとりこむことで重層的茶筅産地構造は確立した．

こうした茶筅職仲間組合の機能保持を困難にしていったのが，戦時体制である．即ち，軍隊をはじめ需要が漸増しつつ確保されながら，1936年の農山漁村経済更正特別助成規則の公布に象徴される農家副業地域の温存・振興の一方で高度の技術・技能を保持してきた茶筅師や茶筅職人，そして底辺をささえてきた熟練した下職や内職労働力が徴兵．徴用で減少し，脆弱化したことである．この需給構造の変質はその帰結として茶筅職人の参入許可による血縁的茶筅師集団から地縁的茶筅師集団への産業地域社会構造の転換を生み出した．

第二次大戦後の混乱期と戦後復興期は，泉州の繊維産業の背後地にあって戦前の木綿業に代わって戦後導入された撚糸業が興隆して典型的農村副業地域を再生し，復員者等を吸引して茶筅産業地域の構造変化をもたらした．さらに，

農地解放の進展や民主主義の確立は，戦後混乱期における地域社会文化構造の変化を契機とした1951年の茶筅茶道具協同組合設立にみられるような茶筅職仲間組合による伝統的血縁・地縁集団を基盤とした産業地域社会の統制機能を低下させていった．

上述した茶筅産業地域の構造の転換は，分家や参入にともなう茶筅師の生活基盤としての農業との関連を変質させ，自家飯米田のもつ支援的意義を低下させていった．そして，高度経済成長期における新たな流派もふくめた茶道と茶筅の社会文化構造の変質を踏まえた茶筅業の工芸から産業への変質も関連し，非農家の参入増加や農家内職の依存度低下にともない産業的には茶筅工芸産地の底辺をなしていた農村・農業との関連が変化してきた．

茶筅工芸の産業化は，二派に分かれた組合を1961年に奈良県茶筅生産協同組合に再統合し，茶筅師を中核とした産地集団の拡充の円滑化を図り，伝統的地縁・血縁集団を基盤とした銘柄性の再生を一方において促した．他方，需要の増大と職人の自立を背景に1965年の田中喜造の職人からの独立に認められる新たな企業形態での茶筅業の近代企業化を生産流通構造の変動のなかで促した．

高山茶筅業の伝統的銘柄性は，1974年の伝統的工芸品産業の振興に関する法律の公布をうけた翌75年５月の指定とその中核をなした組合によって法制的に裏付けられた．こうした伝統工芸品としての銘柄性の公示は，非組合員の田中をしてさらに1976年の株式会社化を契機とした翌７７年からの韓国での開発輸入に向かわせた．これは国際的には1973年の石油危機・円の変動相場制を契機とした我が国産業の国際生産分業の深化をも反映し，国内的には大都市圏の拡充に伴う近郊都市の変化とも内職・下職労働を媒体として深く関係してきた．

この茶筅産業の国際化が，1992年の伝統的工芸品産業の振興に関する法律の改正を契機とした奈良県茶筅生産協同組合による非伝統工芸士製品の銘柄性確立のための手法開発に向かわせた．一つは，生駒市の地域計画にもとずく1989年の高山竹林園の開設による接遇環境改善と茶筅の里の地域構造確立である．これによって，関西文化学術研究都市計画の進展に対応した高山地区と北田原地区の間での茶筅の製造小売を活用した竹細工の工芸化．茶筅・茶器工芸化と再興しうる茶道文化の中核形成の風土・文化の構築を企図した．もう一つは，1994年の奈良県茶筅生産協同組合による独自の商標とパッケージでの伝統工芸品の明示である．

こうした組合の地域産業計画に対して，田中商店は，茶問屋や茶道具屋と一体となった茶器のセット商品開発，通信販売や茶会による販路開拓等市場を掌握しながらも取り扱い商品の多角化等で茶筅を企業存続の基礎市場化しつつ，検品能力の研鑽による品質・生産性向上を計ている．そして，製造小売による買い回り工芸文化の茶筅の里としての茶筅師集団との共存の余地と関西文化学術研究都市の高山第二地区に生まれる大規模公園や住宅を活かした地場産地の革新を促した．さらに，田中商店は高山第一地区に1993年に誕生した奈良先端科学技術大学院大学等の象徴的機能を活用した新竹材開発等を企図し，新たな広域的地域計画で構築されっつある地域構造を巧みに活用しようともしている．両者のこうした競争共存関係が地域計画にもとずく地域構造の変革に適応した高山茶筅産地に今日更なる変容をうみだしつつある．

本論は，1997年カナダバンクーバでの講話の一部に加筆したもである．御教示いただいたカナダオタワ大学・同ブリテッシュコロンビア大学のラポンス教授，ブリテッシュコロンビア大学のエジントン準教授，サイモンフレエーザー大学のヘイター教授，作図を助けていただいた九州大学大学院比較社会文化研究科助手林秀司氏，調査にも協力していただいた浅井素子氏に深謝いたします．

参 考 文 献

久保左文（1978）：高山茶筌　ムラタ　302p
浜谷正人（1966）：生駒産地の一工業村落　人文地理　18-６　pp.89-96
宮川泰夫（1977）：工業配置論　大明堂　pp. 558-581，pp. 605-680，pp. 1035-1075
MIYAKAWA. Y. (1985): Rural Industrializaition in Japan in Rural Industrialization in the Third World countries edited by R. P. Misra Sterling Publisher pp. 193-206
宮川泰夫（1986）：岡崎における地場産業の変容　市史研究　8　pp. 3-36
宮川泰夫（1989）：こけし産地の存続形態　研究報告　88　pp.15-38
宮川泰夫（1989）：国際工業配置論　下　大明堂　pp. 90-137
宮川泰夫（1991）：和紙工芸産地の再生　研究報告　40　pp.11-31
宮川泰夫（1992）：天童将棋産地の変質　研究報告　41　pp. 9-26
宮川泰夫（1993）：京都の伝統工芸の中枢性　研究報告　42　pp.23-37
宮川泰夫（1995）：風土文化の革新と三州瓦産地の変容　比較社会文化　1　pp. 24-48
宮川泰夫（1996）：砥部焼産地の革新機構　比較社会文化　2　pp.37-50
宮川泰夫（1997）：大規模陶磁器産地瀬戸の分化・革新　比較社会文化　3　pp. 19-42
宮川泰夫（1997）：平和の海廊と地球の再生　1　大明堂　pp.277-297
室井綽（1973）：竹　法政大学出版会　311p
奈良県（1993）：奈良県高山茶筅産地診断報告書　33p
奈良県（1997）：地域中小企業診断指導指針作成調査報告書　17p
沖浦和光（1996）：竹の民俗誌―日本文化の深層を探る―　岩波新書　243p
岡村重雄（1957）：綾部市における旦寺部落と竹細工業に就いての人文地理学的研究　人文地理　3　pp. 56-63